

特242

401



\*0038912000\*

0038912-000

特242-401

大満洲正義団略史

正義時報社出版部

3版  
昭和13

AGH



550

特242

401



大滿洲正義團略史

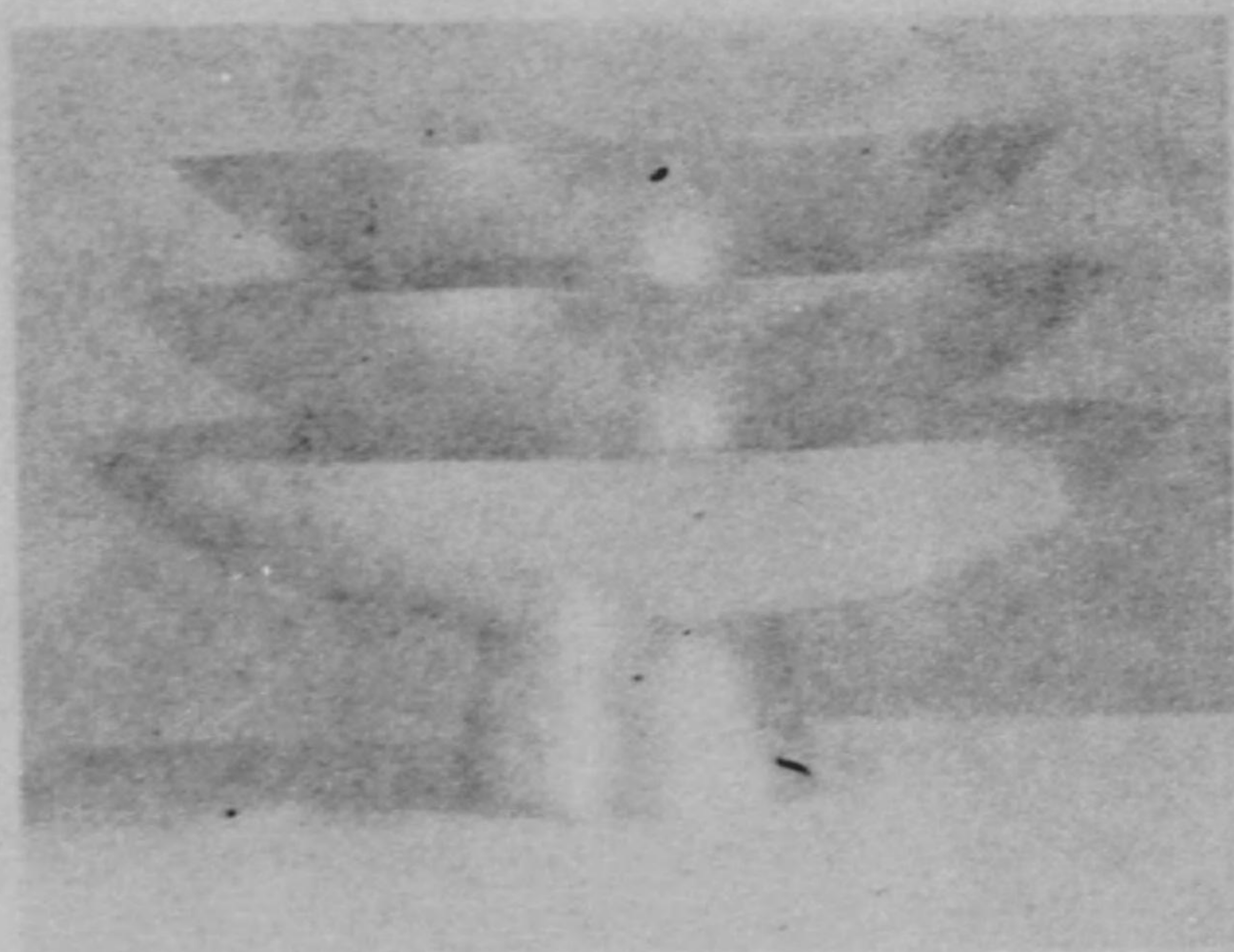
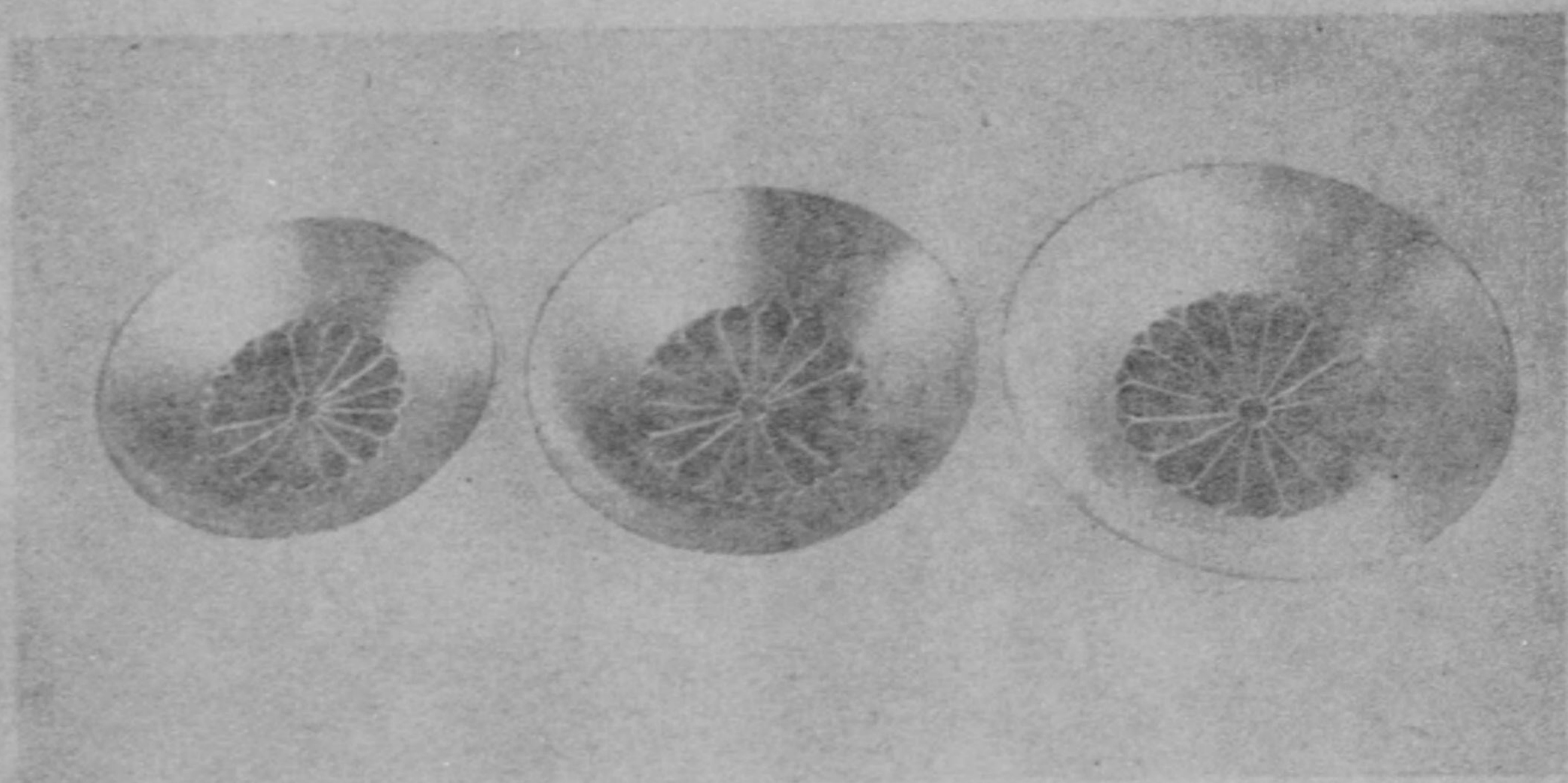
7  
20



特242

401

るらせ賜下組壹杯銀に盟主



滿洲事變第二次百賞に際し、わが酒井主君が滿洲國臨時奉天府を治する功勞を賞與せられ、菊花御紋章附銀杯壹組を賜はつた。また木村總務に對しても菊花御紋章附銀杯壹組を下賜せられた。(昭和十三年五月二十九日官報附録)

酒井榮茂

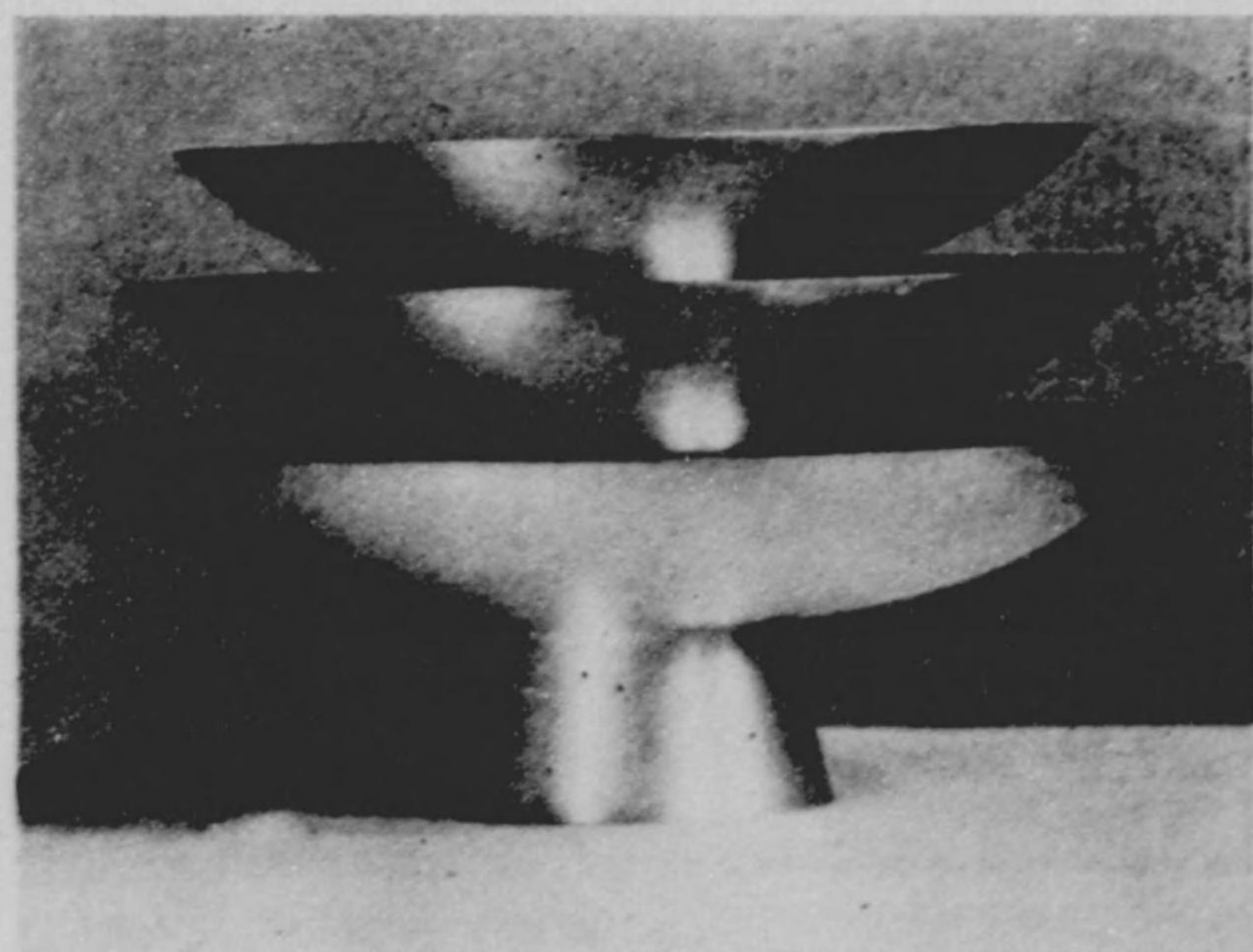
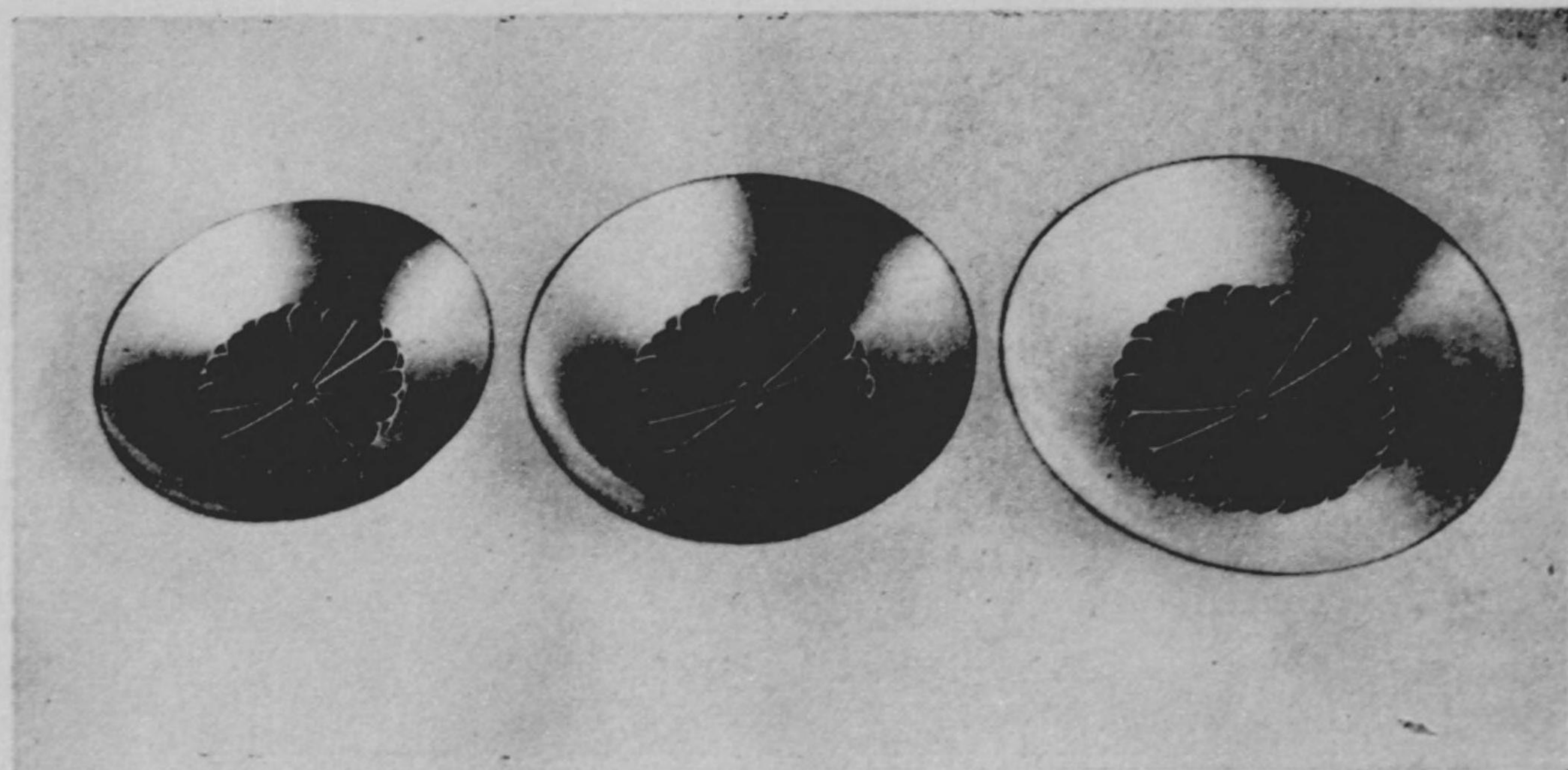
昭和六年乃至九年  
事變ニ於ケル功ニ依リ  
銀杯壹組ヲ賜フ

昭和九年四月二十九日

賞賜證書第百三十号



るらせ賜下組壹杯銀に盟主



滿洲事變第二次行賞に際し、わが酒井主盟が滿洲建國當時盡瘁せる功勞を嘉賞せられ、菊花御紋章附銀杯壹組を賜はつた。また木村總務に對しても菊花御紋章附銀杯壹箇を下賜せられた。(昭和十三年九月二十九日官報發表)

酒井榮藏

昭和六年乃至九年  
事變ニ於ケル功ニ依リ  
銀杯壹組ヲ賜フ

昭和九年四月二十九日

賞勳局總務課長等下條康磨





大滿洲正義團奉天本部 天津城內小北門

(滿文) 我大滿洲正義團

按我大滿洲國之歷史，如遼金之遠昔者不論，及至近世為清朝發祥之地而呈為一時封禁之聖地，除滿族以外，不許移居於此，迨清朝之中葉以降封禁弛緩，漢民之移住者，與年並增，又加之以回蒙藏族，由清之末季及民國年代，則五族混同，重工商勸農牧於此天惠之樂土，專謀安居矣。然自入民國以來，軍閥據之，迨至近年，張家二代之苛斂誅討，已達其極人民交飽嘗其塗炭之慘苦矣。

時當昨秋九月，學良之皇志，女演自掘陷井而投之愚，與正義之軍無法抗衡，遂至舊軍閥亡而王道興，新興之大滿洲國，於本年三月九日生之矣。嗣後，無論朝野，對於王道國家之建設，雖均勇往邁進，惟國家創生之日尙淺，國民之精神尙未健全，如斯則將來得否完全生長，是吾人最憂慮者也。於茲，吾人欲依王道之精神，並與協力協和之鐵則相合之正義的力量，養成健全之國民精神，而謀國民生活之安定。

譬如新興國家，現將要成就成長之緒，如其國民之營養不良，終不能獲得一國之健全國民的基礎，即當此際，須豐富供給其以營養物也。然其營養物者何？先曰，第一在振刷健全的國民精神，次在得國民生活之安定，當作此生活安定之基礎，孰亦不如舉協力協和之實，協力協和者，在涵養國民之一致團結互相扶助之精神也，此誠為樹國家百年大計之本源，王道精神發露之處，有強且正，光明之正義在焉，正義之所向，恐天下無敢遮之者。

反言之，我正義團之唯一精神者何，即在行正義之道於天下也，然則正義者何？曰行神聖之道也，正義者神聖也，夫正義之神聖，對於吾等國民，賦與最偉大無限之力，吾等個人固屬無力可憐之弱份子，但將此個個之無力弱小者，一致團結，則成一大偉力，依此表現之力，至於判別諸種之正邪曲直。一面再與新興大滿洲國建國精神之王道比之，王道者孔孟之教也，亦在行神聖之道也。即在躬踐實行正義神聖所示之教而已，且新興國家之建國精神，以國民一致團結為主旨，實與我大滿洲正義團之大精神，完全適合，毫無悖處。

即曰，我大滿洲正義團，依如上叙上強且正義之大精神，身心俱強健者團結之大偉力量，超越人種，踏逾國境，布王道於四海，扯正義之大旗而前進者也。正義之神，援弱憫哀，世界何人，均能擁抱彼救來！快來！新與大滿洲國之人民諸子來入我大滿洲正義團之盟，於正義之大旗下，無力者獲無限之力，不幸者俱依血盟團結之力，開拓至大至尚之幸福生涯也可。

大同元年八月

大滿洲正義團







躍活之部本天奉



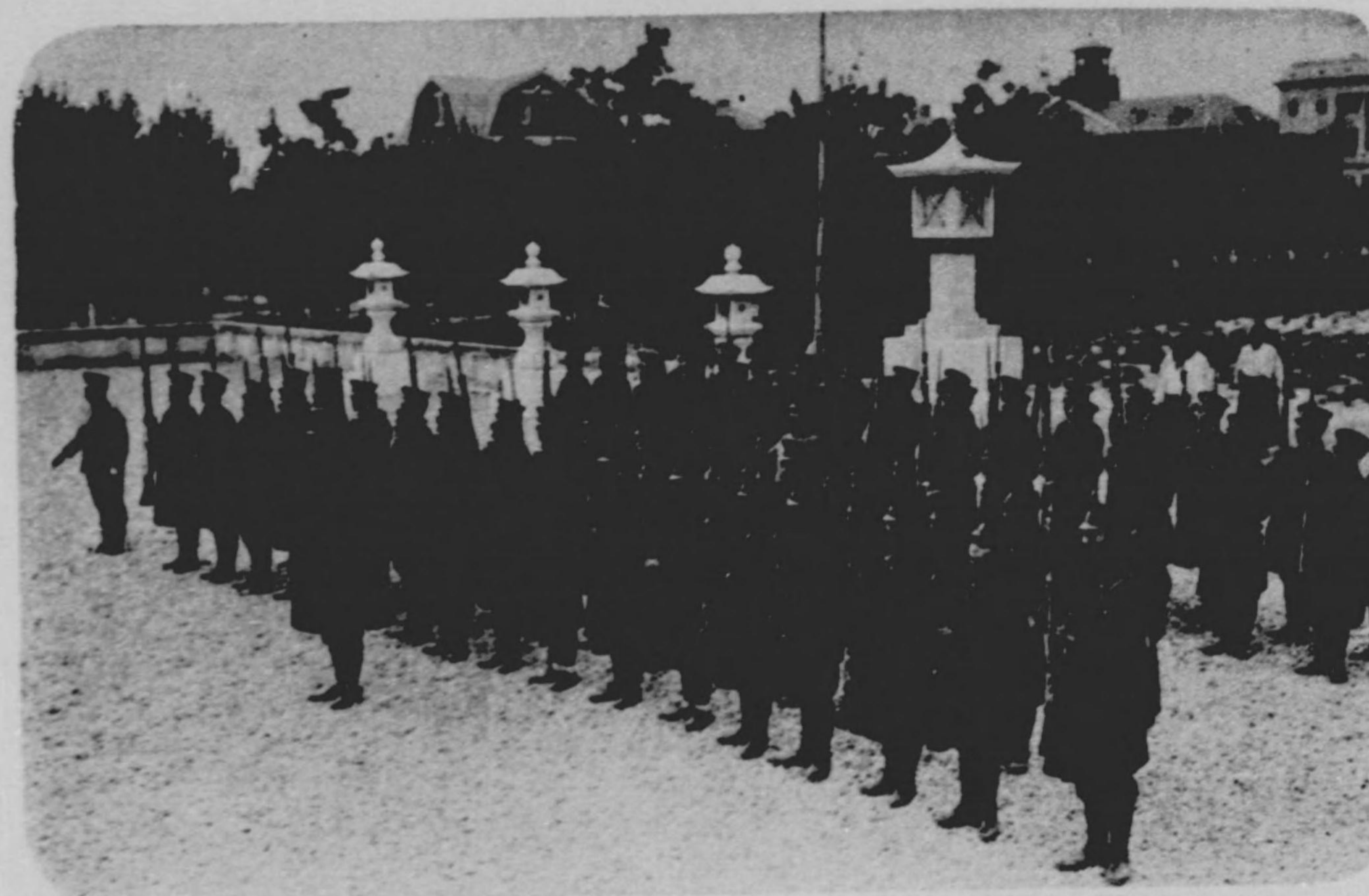
盟主井酒るすとんせ勤出に將

將中兩沼永・紫筑見會部本天奉於

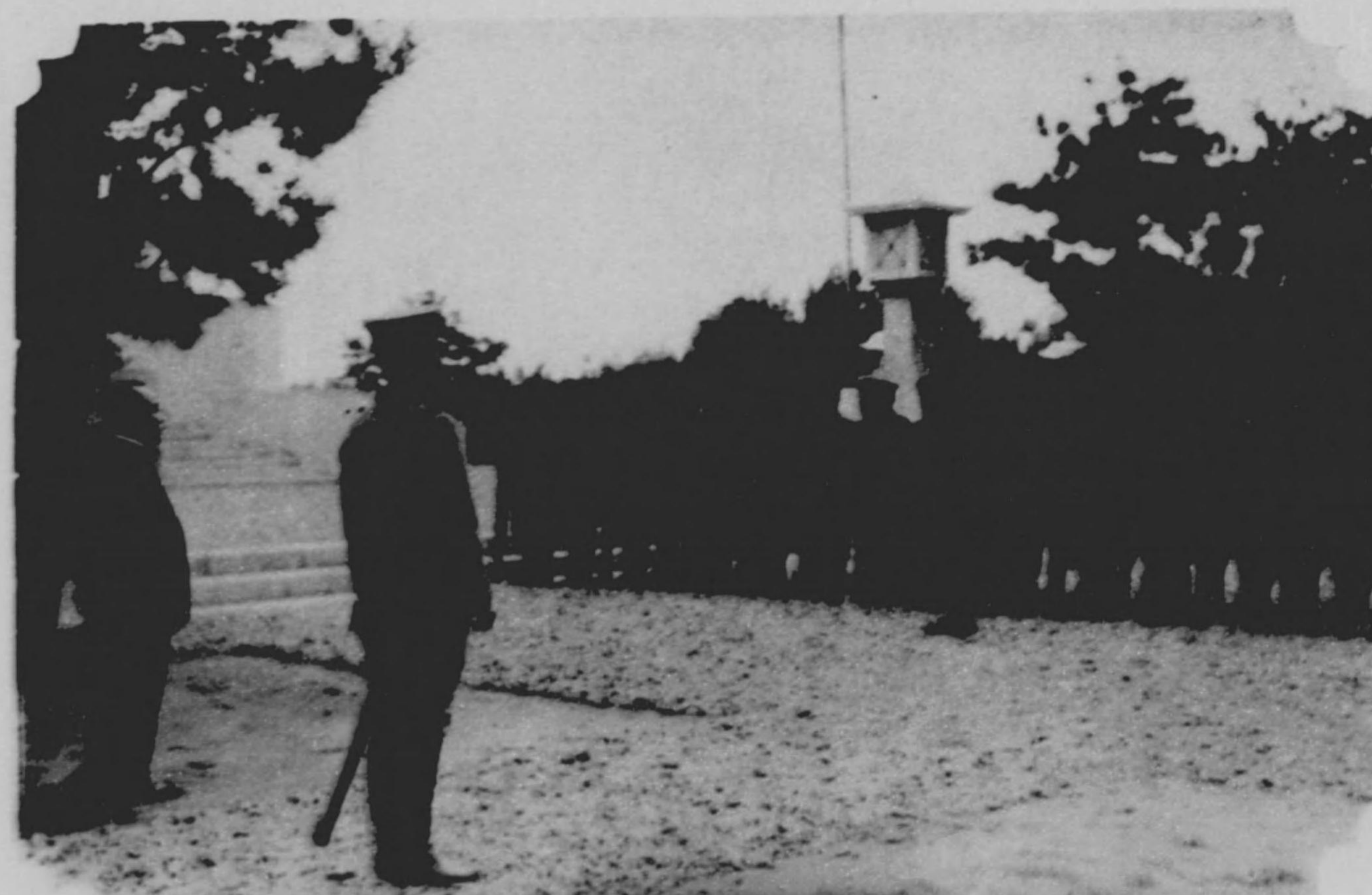


長部育教野矢（者立後）、務總村木（左）、議參紫筑將中（央中）、將中沼永（右）

員團之塔靈忠拜參



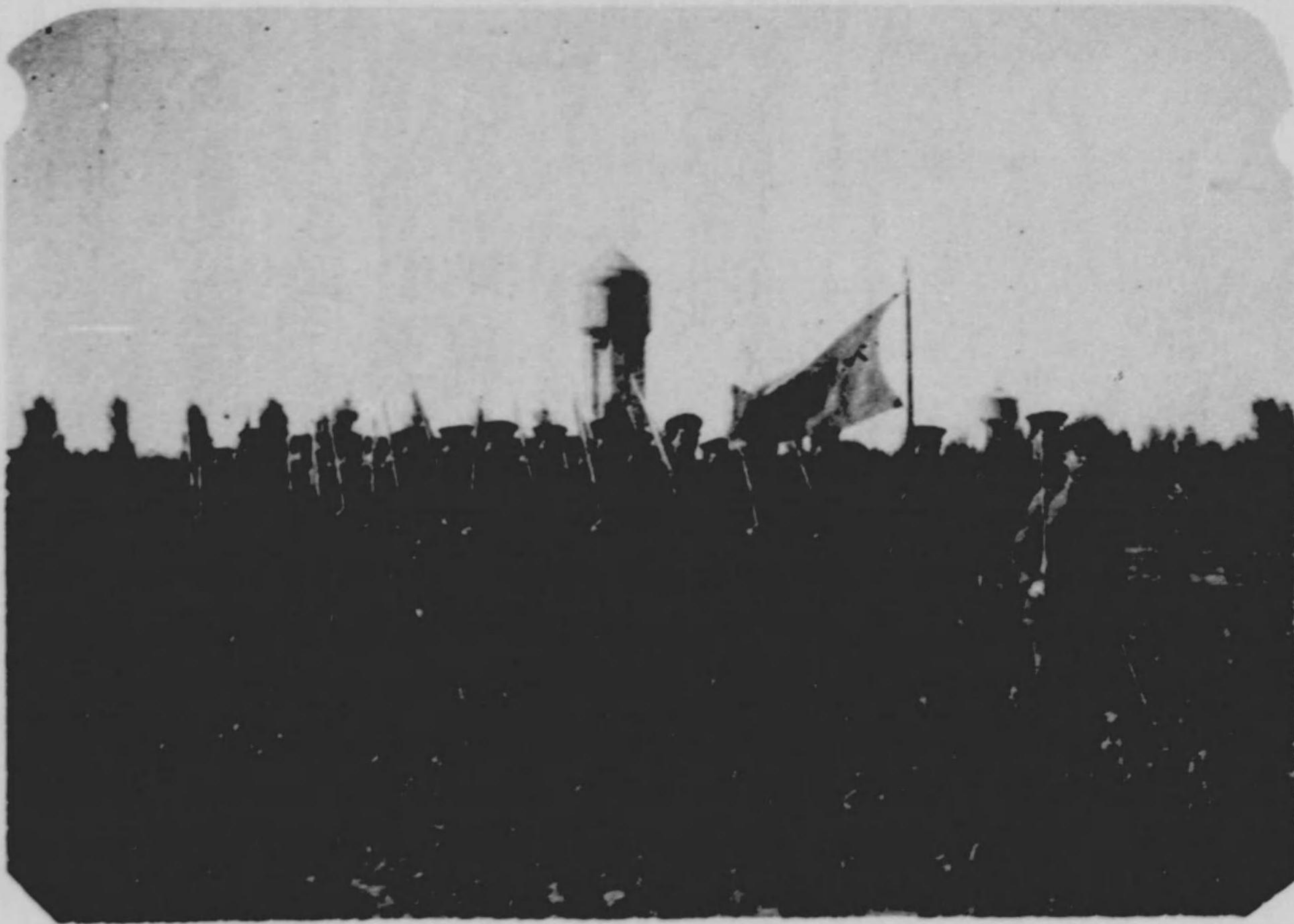
十拜參同一へ塔靈忠天奉れさ許を裝武上衛自り限に員團義正洲滿大  
（日五十二月八年元同大）



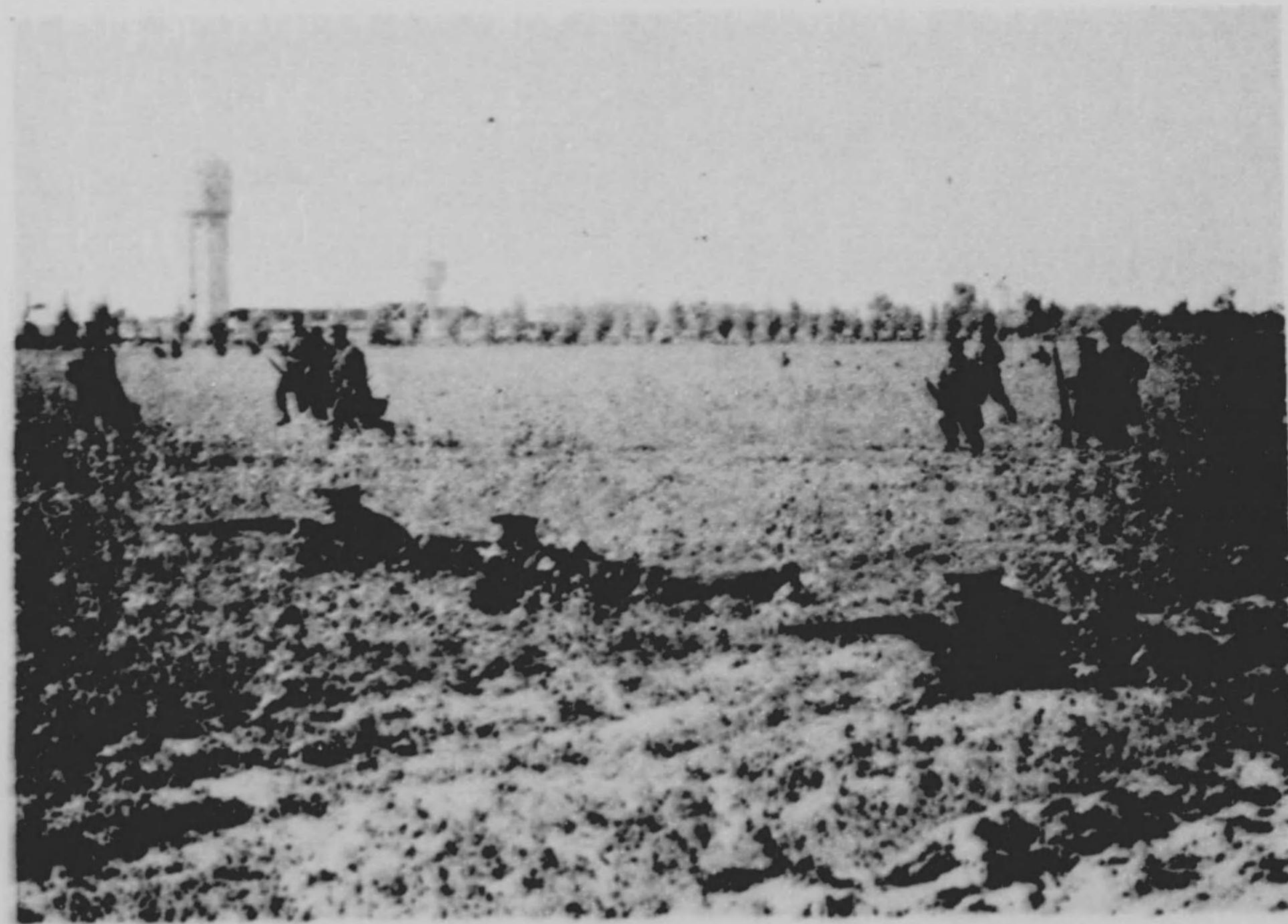
官令司同、し會出に拜參の官令司軍東關庄本し際に拜參塔靈忠天奉  
所るへ與を示訓の場一し對に員團義正我り依に請懇の盟主井酒は



(一其) 練教習演之員團本



ろことろす發出に習演外野昂軒氣意



習演擊射兵散るな心熱

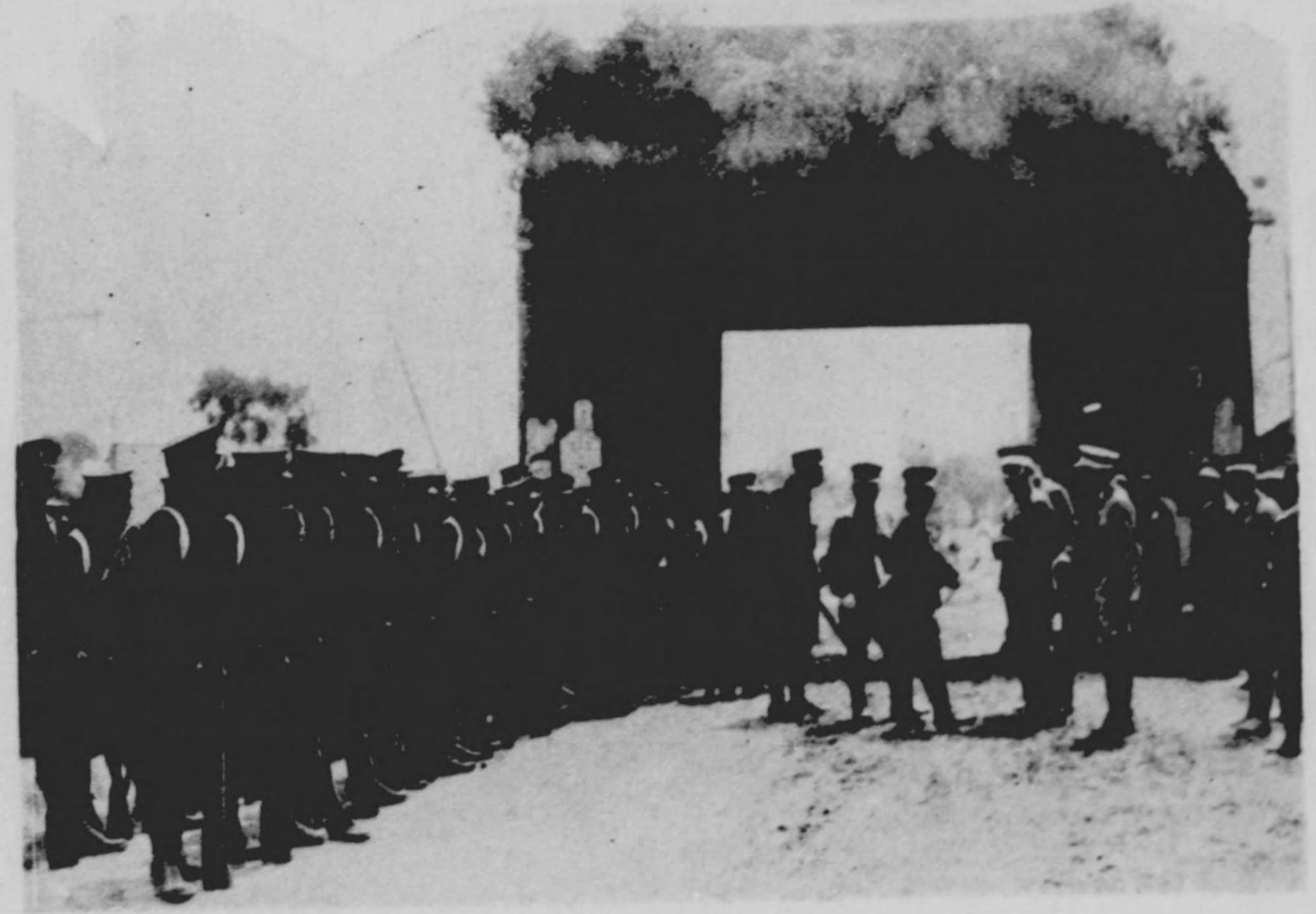
(滿文)

大滿洲正義團爲充實威容計由本團教育部長矢野少佐指揮之下每日在野外行猛烈之演習以努力教練團員圖即其奮闘景況

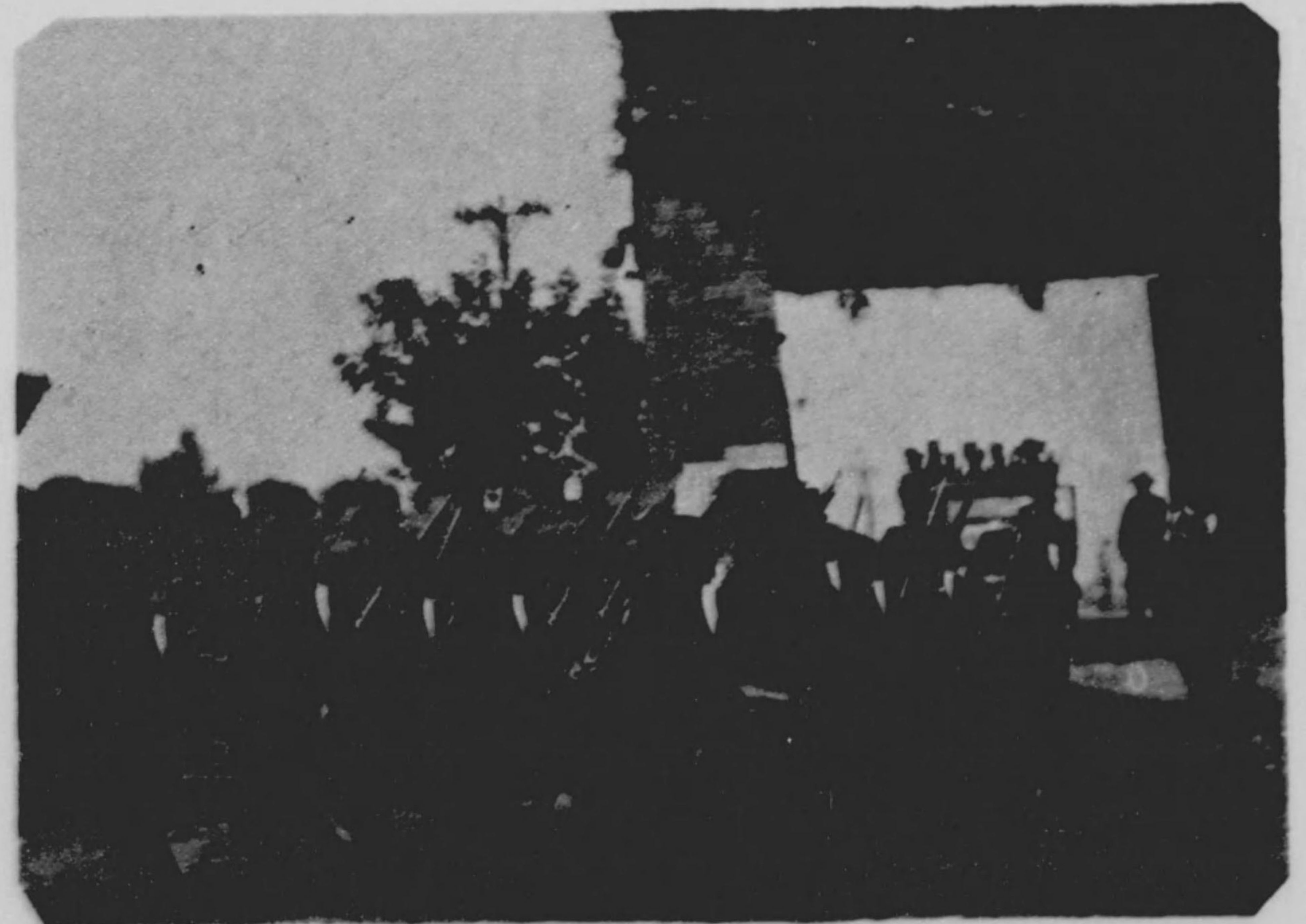
(日文)

大滿洲正義團は威容を一層充實するため本團教育部長矢野少佐指揮の下に日々野外に出でて猛演習を行ひ團員の教練に努めてゐる。寫眞はその奮闘振りである。

陣臨次初之團義正洲滿大



隊部伐討團本之中劃策警巡與  
(隊部伐討團本の中せ合打と警巡)



隊部團本之還歸了終伐討  
(隊部團本ろす還歸てへ終伐討)

(日文)

大同元年八月二十七日夜奉天附近に匪賊襲來し本團は奉天警務廳と協力してこれが討伐警戒に當る、實に大滿洲正義團最初の出陣である。

(滿文)

大同元年八月二十七日夜奉天附郭匪賊暗襲之際本團與奉天警務廳協力充任討伐警戒此爲大滿洲正義團最初之臨陣



員團裝武閱檢盟主井酒



盟主之上馬式列分閱檢  
(盟主の上馬るす閱檢を進行列分)



(長部育教野矢與務總村木傍盟主)列整之員團閱檢盟主上馬愛  
(長部育教野矢と務總村木ら傍の盟主)列整の員團るく受を閱檢と盟主の上馬)

(二其) 練教習演之員團本



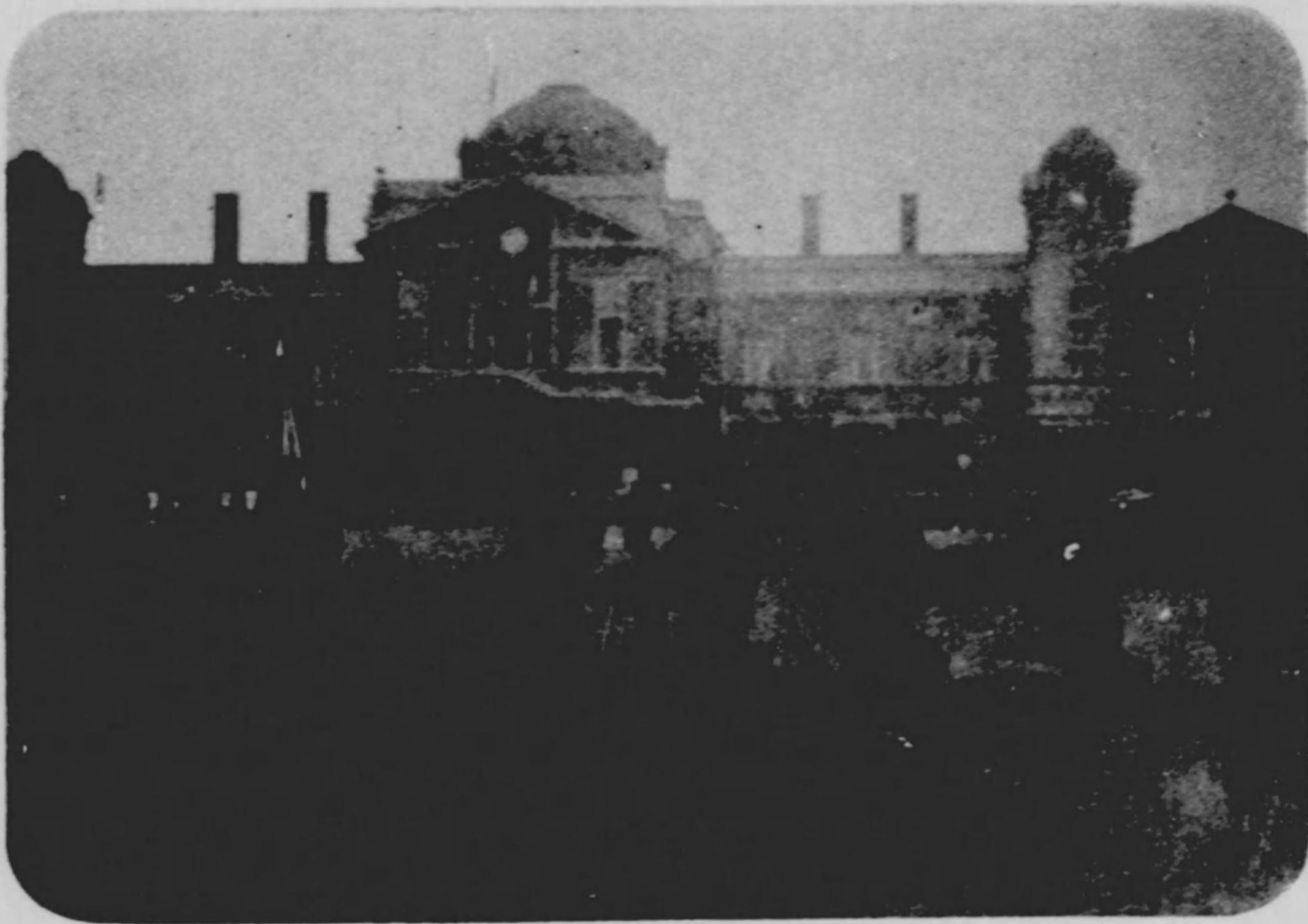
二之習演擊射



盟主井酒之共與苦辛上馬及習演員團之背浹流汗  
(盟主井酒の上馬るすに共を苦辛の習演と員團れみまにり埃汗)



(一其) 賊馬之團本順歸



〔てに頭驛天奉〕部一の員團拔選ふ向に山盤ていつを曉拂



觀壯るせ合集の名餘百三千賊馬順歸て於に臺家盤

(日文)

盤山の馬賊千三百餘名が本團の主義精神に感激して遂に歸順することになり、馬賊歸順式といふ空前の大快事を行ふため、酒井主盟は大同年九月二十五日遠拔團員二十名を引率して自ら盤山縣の現場に臨んだ。

(滿文)

盤山之馬賊千三百名因感佩本團之主義精神遂就歸順之途此馬賊歸順式實爲空前之大快事因此酒井主盟於大同年九月二十五日引率選拔之團員二十名親臨盤山縣現場

閣東裝目頭順歸

裴東閣が主盟に自分の履歴を書いて提出したもの

作履

裴東閣現年五十二歳住盤山縣

後入東亞義勇軍少隊統領委在哨官又調新

石哨哨官三十四年改編左路池防後哨哨官宣統二年又暫編陸軍

營工連上尉連長至民國七年蒙旅長張復陸軍旅旅二團三營中校營長民國十年蒙旅長

第十旅一團中校營長民國十年蒙旅長趙理軍團長民國十三年又蒙旅長

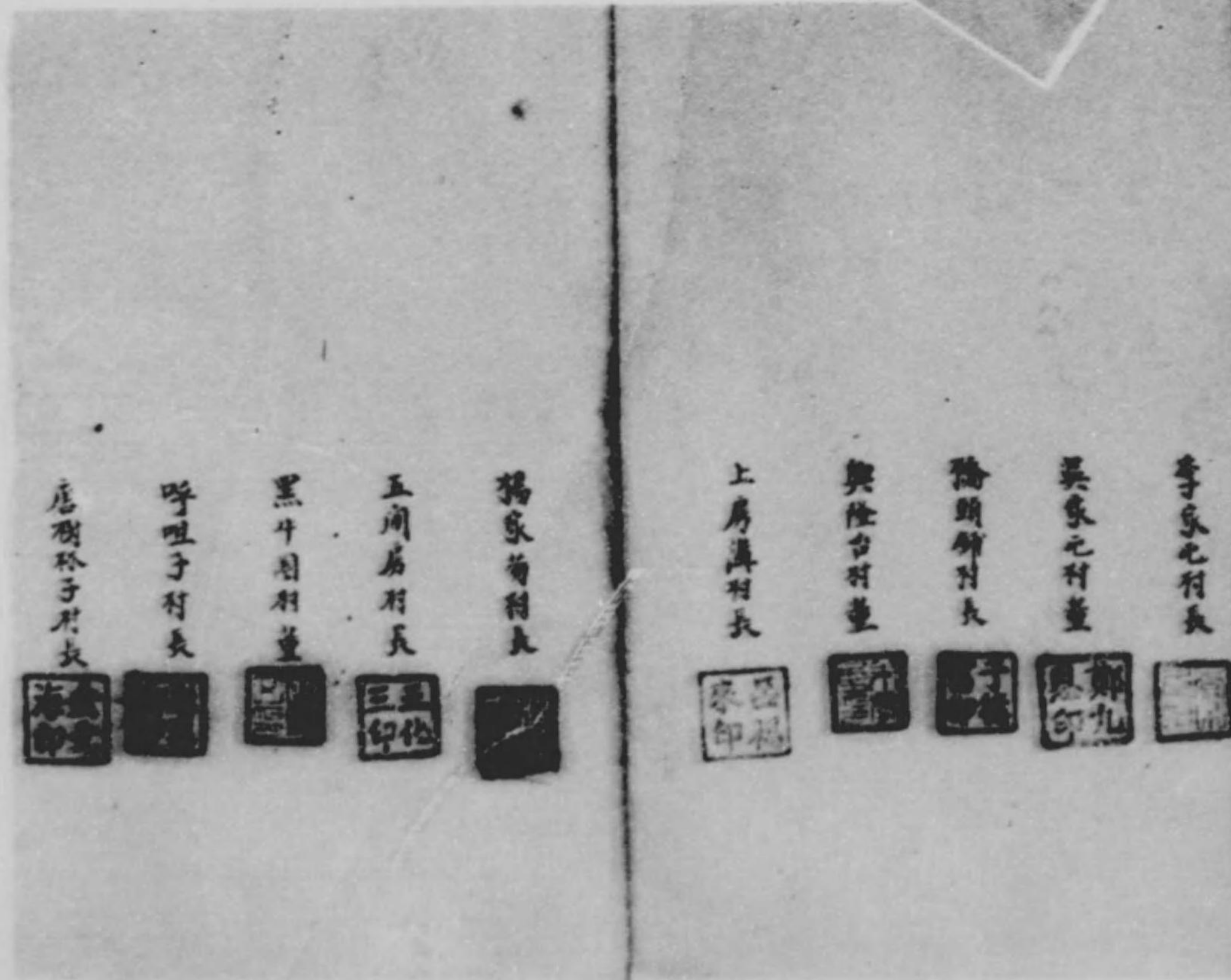
軍長委充旅長第十旅旅長四年又蒙旅長河青統編充騎兵第二旅旅長少將統編於平

年七月調任陸軍河陸軍第三師師長十九年不蒙旅長趙理軍團長民國十三年又蒙旅長

旅長委充旅會會長所具履歷是實

陸軍中將裴景奎

維持盤山全境對峙清匪日長如有他意對峙歸順者著實完全責任再對日人無礙軍式到地等語以保後進此出功謹呈  
正長國鈞鑒



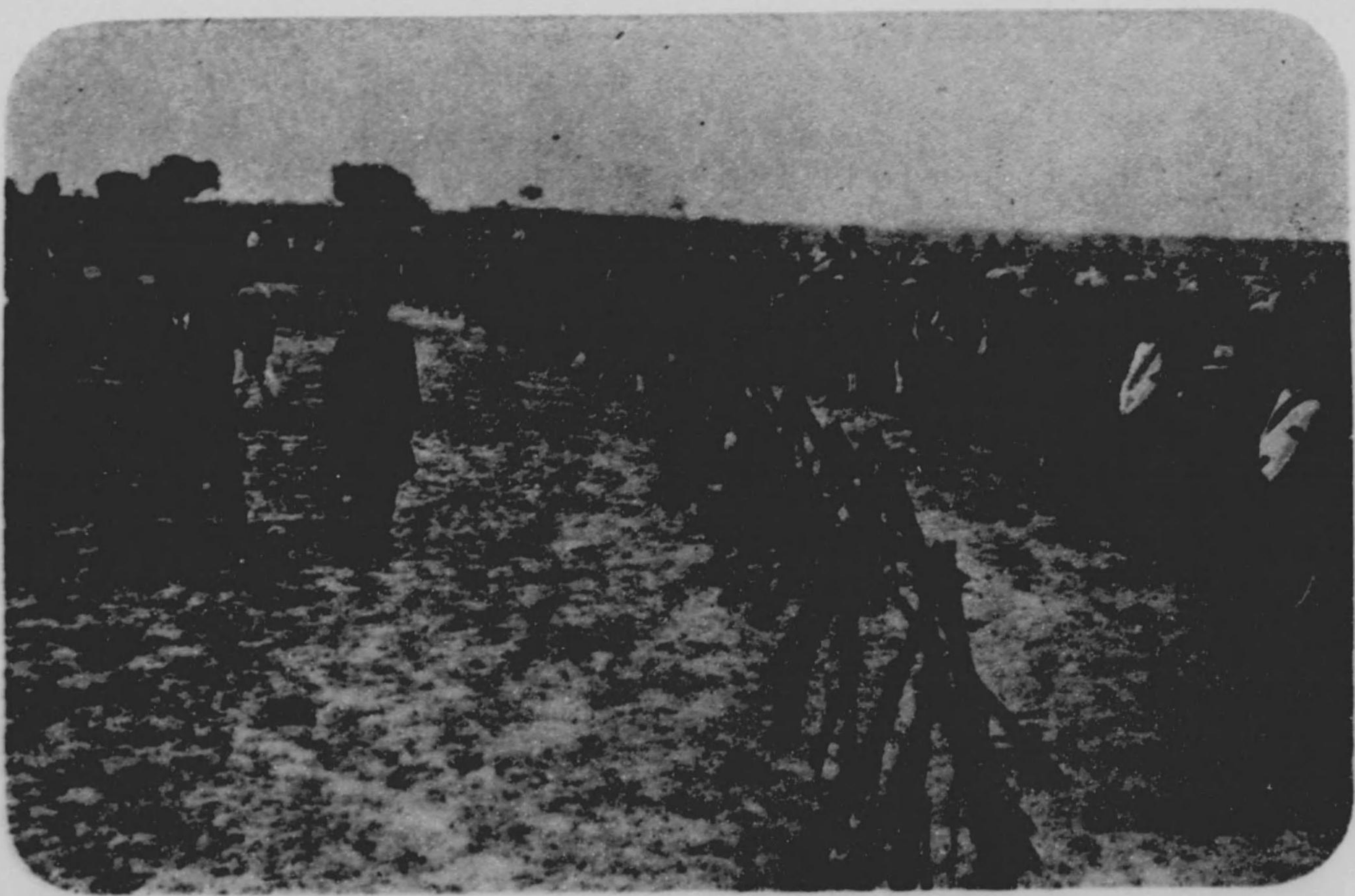
紙手たて宛に團本とれ吳てし許を順歸の閣東裴が長村各の下縣山盤



(三其) 賊馬之團本順歸



賊馬るせ列整てし馬下



賊馬るせ列整に前を器銃てし除解装武

(二其) 賊馬之團本順歸



列排之許里一亘約賊馬之馬乗  
(ろことろせ列整り亘に町數十が賊馬全の上馬)



閱點馬下部全賊馬令命  
(す檢點し命を馬下に部全賊馬)



(五其) 賊馬之團本順歸



(閣東裴左盟主井酒央中) 影撮念記山盤於  
 (閣東裴左 盟主井酒央中) 影撮念記るけに山盤)

問訪部本天奉謀參同閣東裴目頭後順歸



(務總村木左閣東裴央中)

(四其) 賊馬之團本順歸



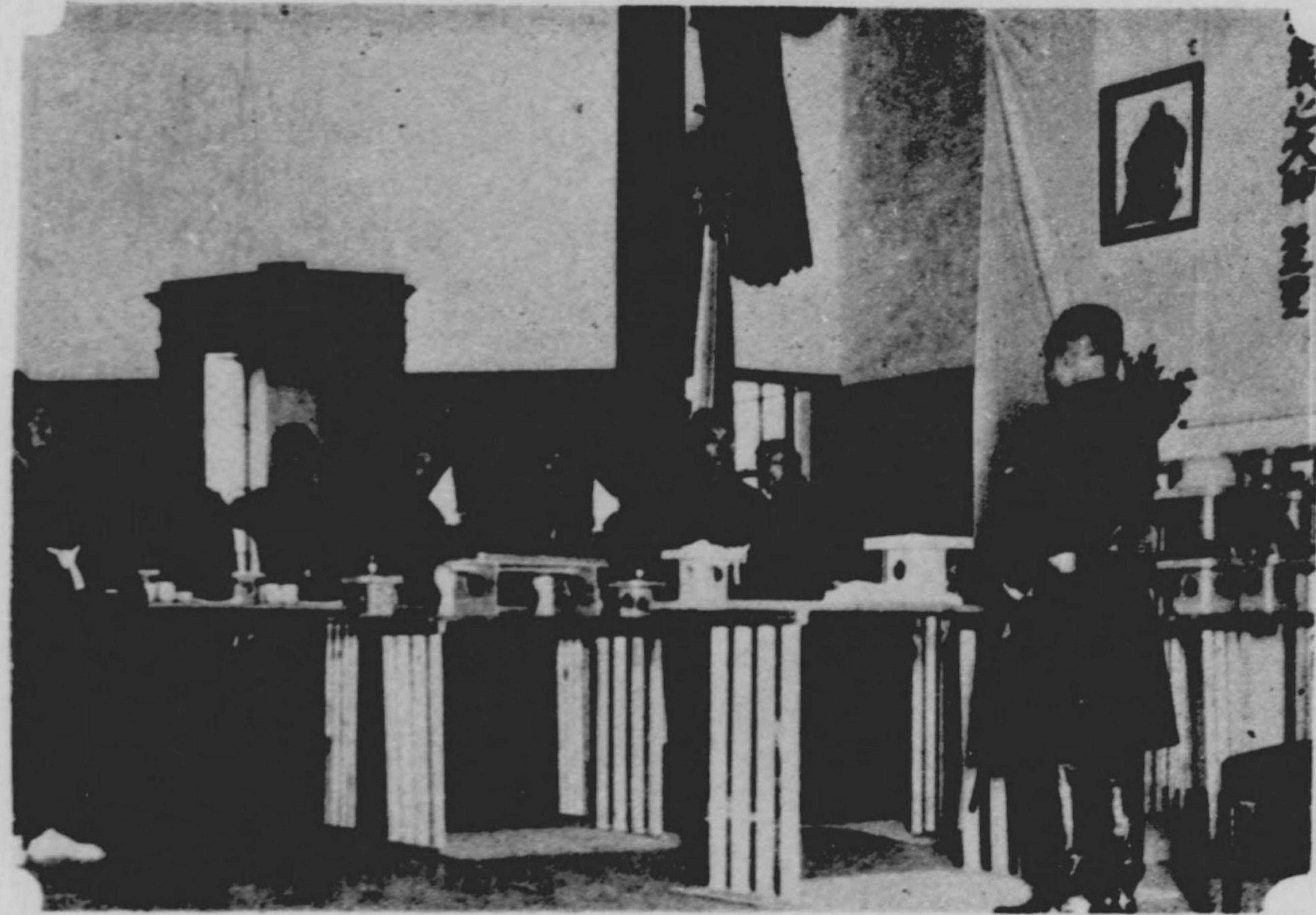
↑  
 頭目裴東閣初次同  
 小頭目等以本團胸  
 手禮行入團略式  
 (頭目裴東閣初め  
 小頭目等が本團の  
 胸手の禮を以て入  
 團略式を終つたと  
 ころ)  
 乗用陸軍裝甲車由  
 盤山就歸途之主盟  
 (陸軍裝甲車にて  
 盤山より歸途につ  
 く主盟)  
 ←



況情之手握盟主與閣東裴際之發出山盤山  
 (ろことろす手握が盟主と閣東裴し際に發出山盤)



團入之警巡國洲滿



禮手胸之嚴莊行時杯誓於等警巡國洲滿之團入團本在  
(禮の手胸きし々標、盃誓の警巡國洲滿るせ團入に團本)



等警巡國洲滿之杯受候待  
(ちた警巡の場滿るけ受待を順の盃受)

(日文) 輝く大満洲正義團には近來滿洲國巡警の入團著しく増加し來つた、最近の宣誓式はその大多數が巡警たちで非常な盛況を呈した。

(滿文) 燦爛生輝之大満洲正義團近來滿洲國巡警入團者多見増加最近宣誓式中有大多數巡警參加頗呈盛況

式誓宣之初最國洲滿大



ちた人國洲滿の盟加新るす立起に場式誓宣



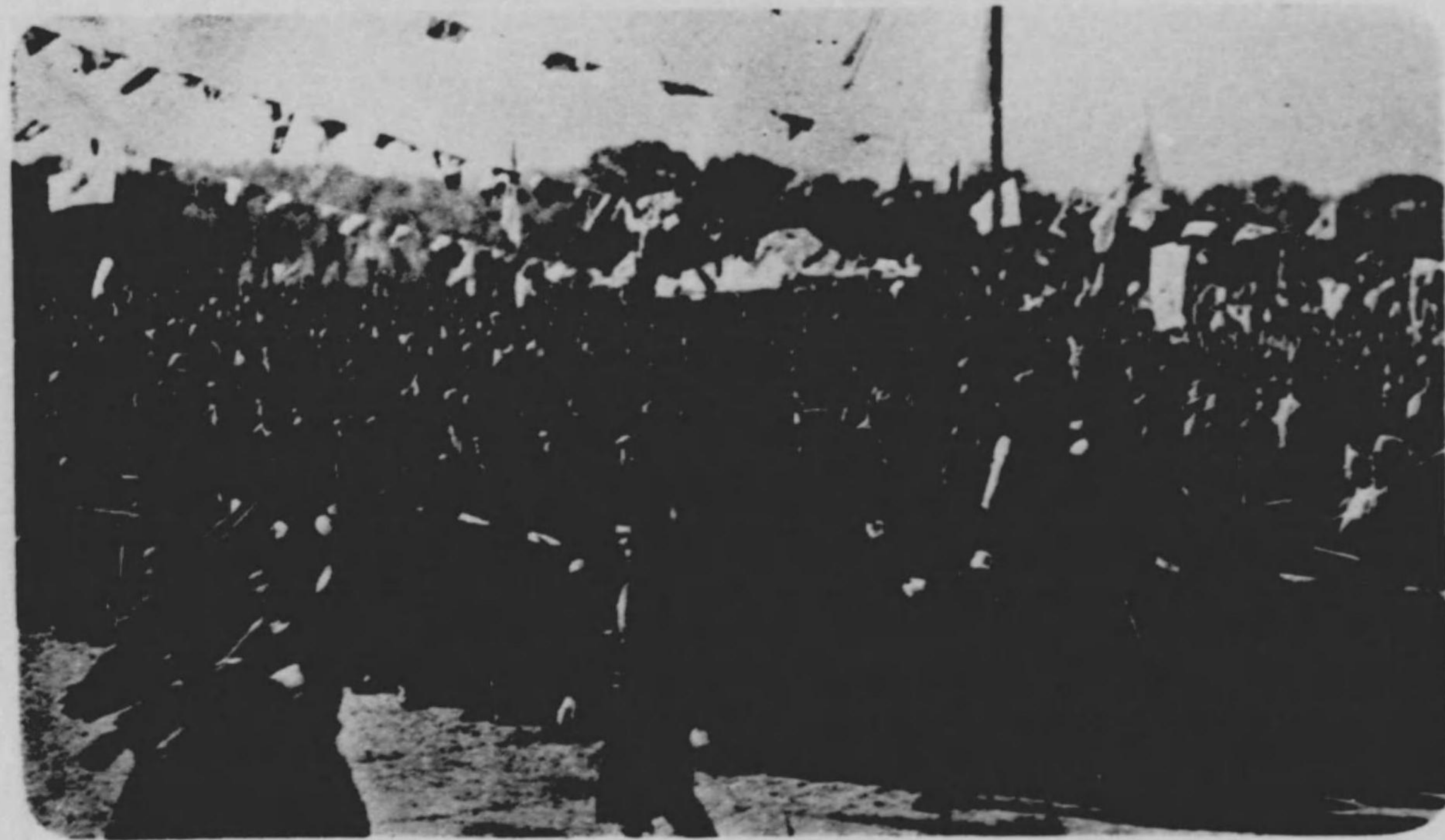
員團新ふ行を禮の手胸の團本し對に盟主

(日文) 大満洲正義團の遠大な抱負と主義綱領に共鳴する人々は滿洲國の老幼婦人等に至るまで續々と殺到し、正義の神の下に一致團結の希望に燃えつゝ、加盟を申込むもの五百餘名に達し本團は大同元年九月八日奉天警務廳大講堂に於て滿洲最初の大宣誓式を行つた。

(滿文) 大満洲正義團之抱負遠大及主義綱領之純正致以贊同者多滿洲國老幼婦人等均能繼續欽服希望在正義之神下一致團結勇躍入盟者達五百餘名本團於大同元年九月八日在奉天警務廳大講堂舉行滿洲國最初次之大宣誓式



式誓宣之外城天奉於



盟主井酒の上馬  
式場入るな肅嚴へ從を員團るせ装武



列整の連部幹部支各内市天奉



唱三歳萬てつ持を旗國が同一員團の誓宣

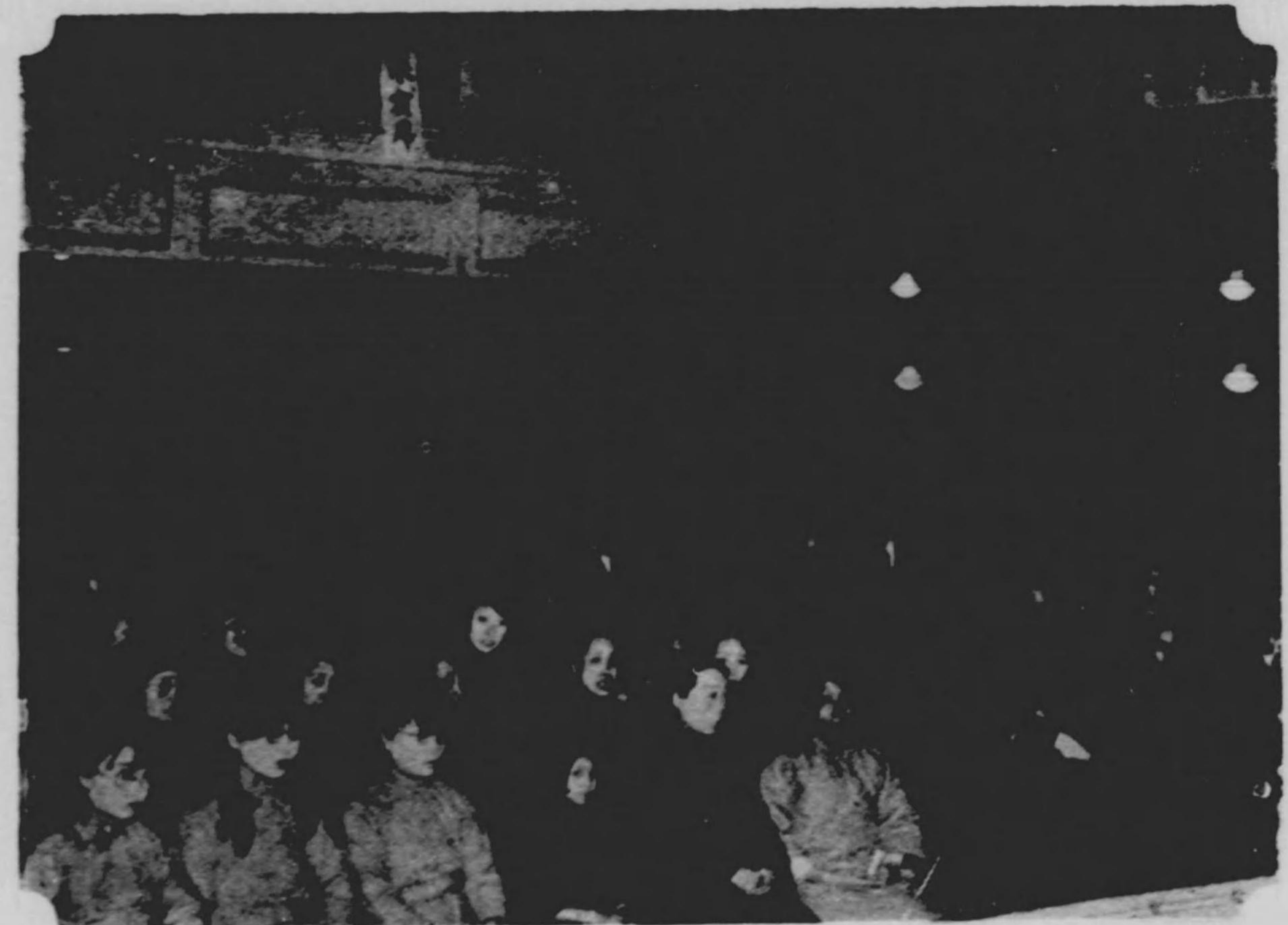
(満文)

大滿洲正義團於大同元年八月奉天創設本部業經舉行四次入團式然後且於新京設置本部又在各地開始創設支部節々進行本團依指導原理與滿洲國建國之精神王道主義一致團結互助扶助爲基礎用其團結力以掃除至今生活不安之苦痛使渴盼已久安居樂業之理想得有一家團樂之樂境故今滿洲人間似有形成建築鞏固地基之勢矣

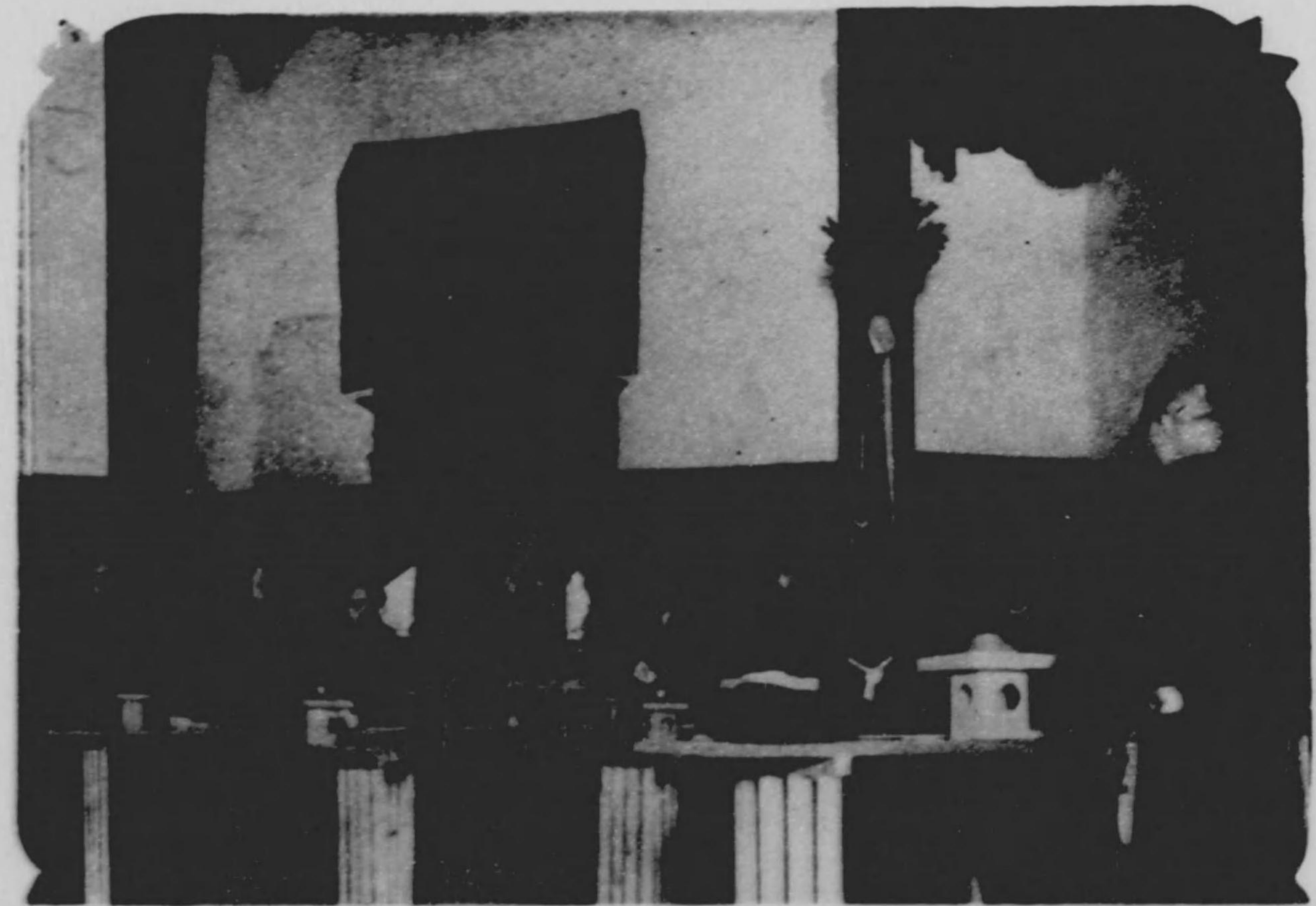
(日文)

大滿洲正義團は大同元年八月奉天に本部を創設し既に滿洲國の精神たる王道主義と一致團結互助扶助を味ひ得らるゝあり。其の團結力に依りせずして本團に渴仰共鳴し歎しき入團者を見ん既に滿洲國の間に確固たる地盤を築き素晴らしい勢力を形成しつゝある。其の團結力に依り

増激團入之人婦國洲滿



ちた人婦國洲滿數多の場滿るけ受待を誓宣の義正



ろことるけ受を盃み進に前の盟主に順らか人婦の長年

(日文)

大滿洲正義團の眞價は婦人達の間にも喧傳され、自覺せる滿洲國婦人達は續々と本團に入團するもの激増して來た。

(満文)

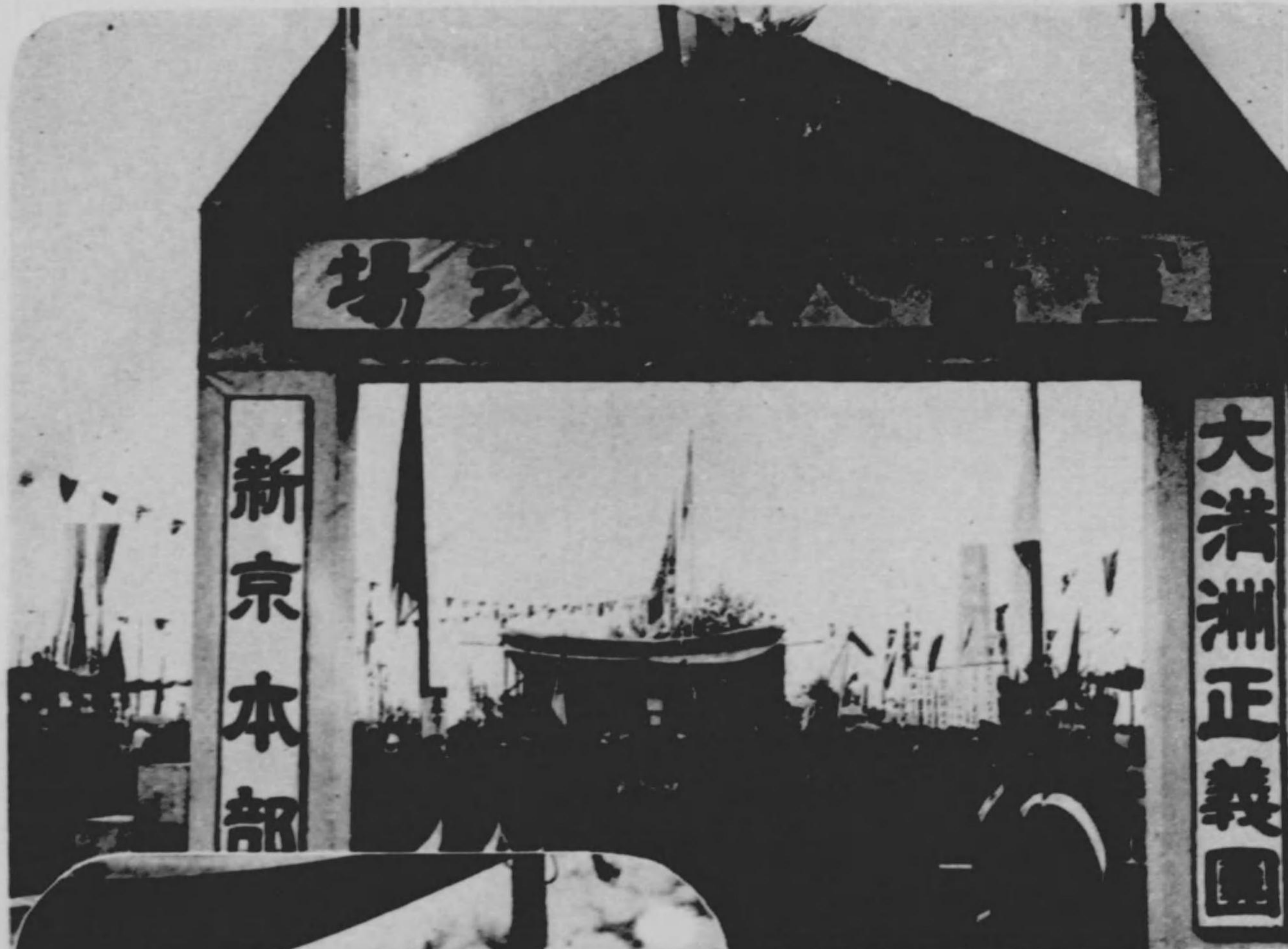
大滿洲正義團聲價之傳播婦人中悉能自覺故滿洲國婦人等加入本團者繼續激烈增加



新 京 之 宣 誓 式

(日文)

新京西公園大廣場に於ける誓盃式の壯大なる光景



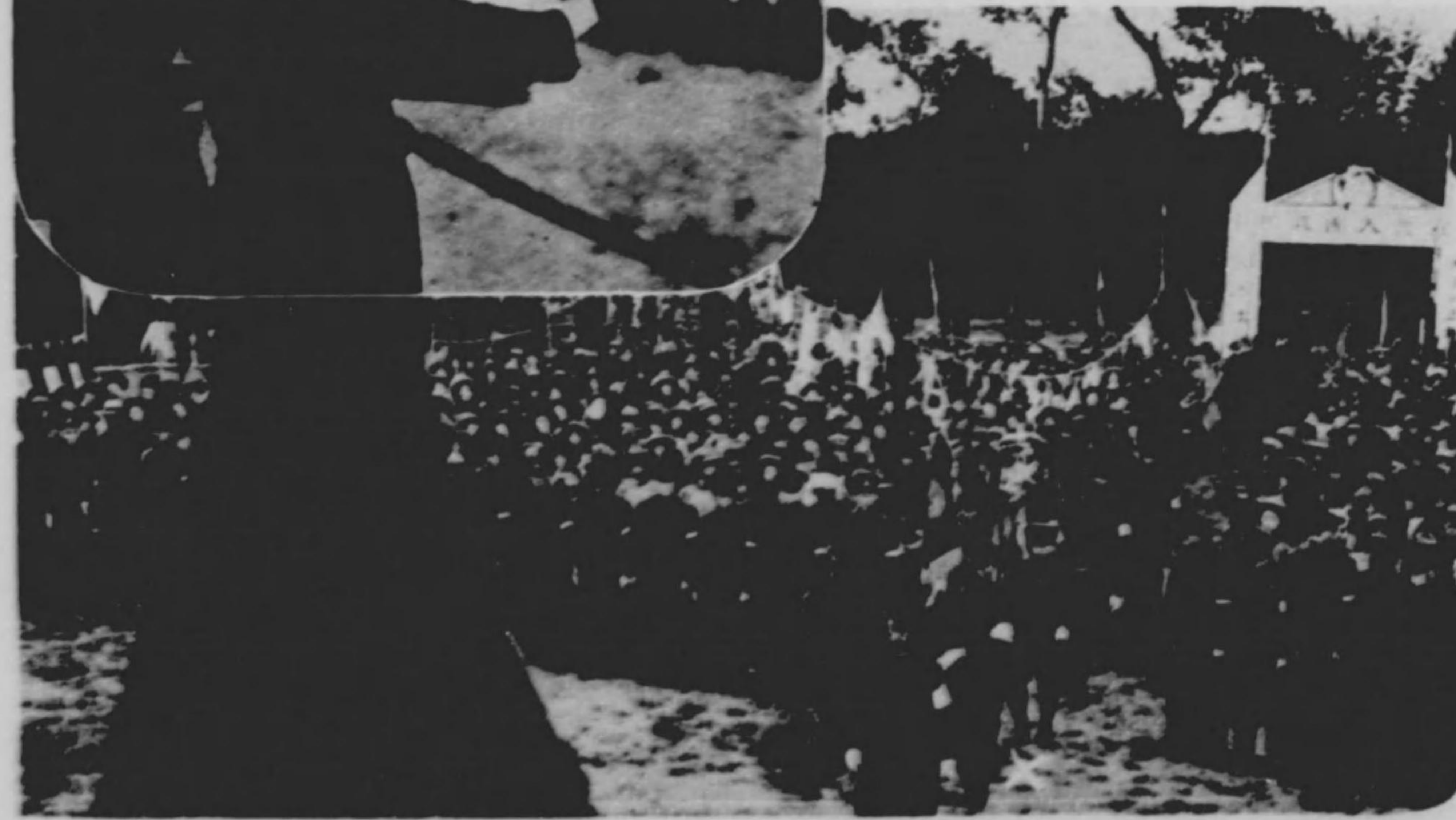
(滿文)

於新京西公園大廣場誓杯式之壯大光景



↑ 宣誓式全場景

← 盟主朗讀誓文

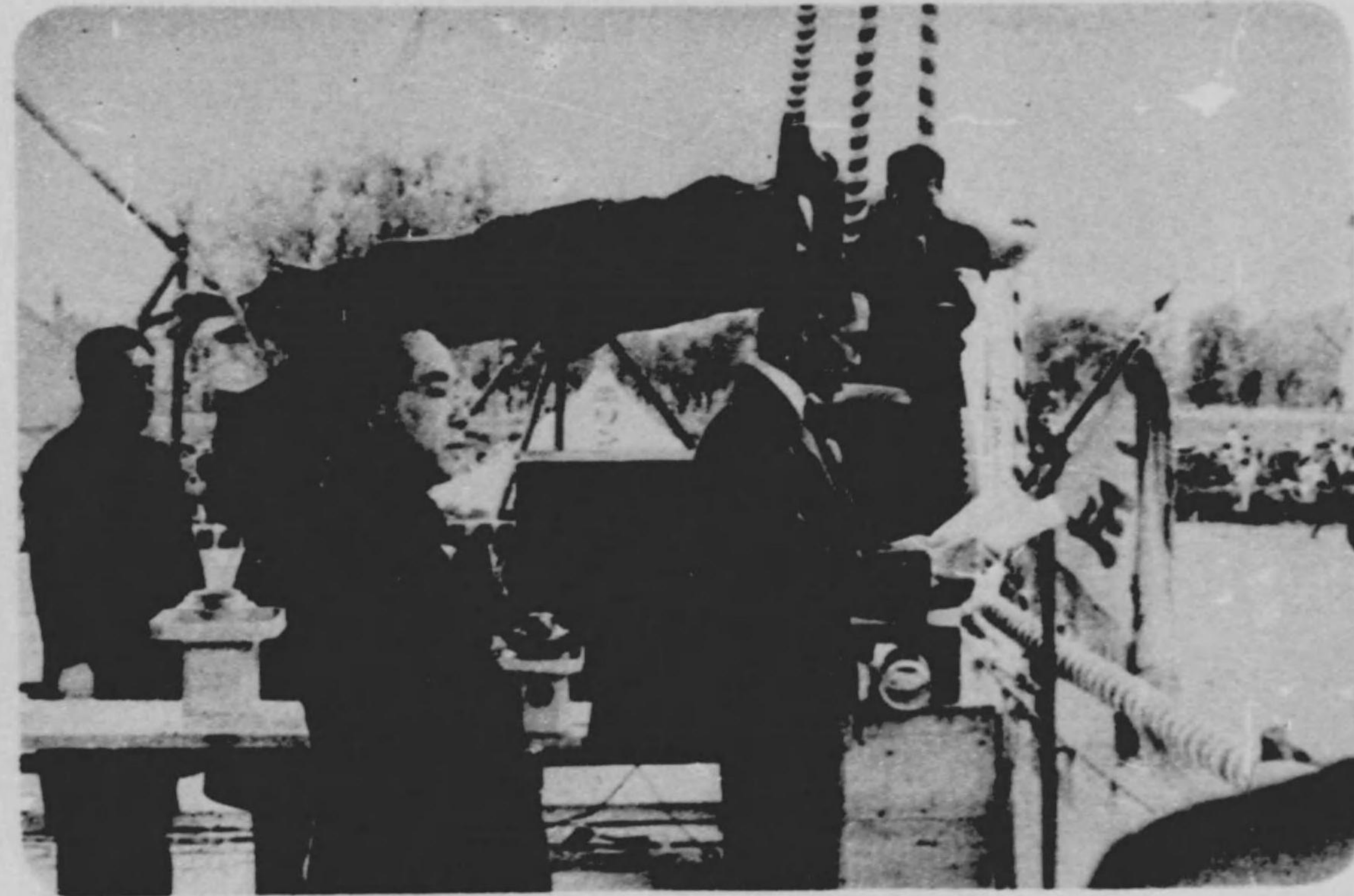


(日人三りよ頭先) 盟主む臨に場會大

奉 天 城 外 之 宣 誓 式

(日文)

茲に大同二年四月七日中の新入團者約七千名に對し五月二十八日奉天城外の大廣場たる小河沿萬泉園體育場に於て莊嚴なる入團宣誓式を舉行した。何分七千名の膨大なる人員とて從來の誓盃式を變へ最大數一齊入團宣誓の新らしい本團獨特の方法をとり盟主の指揮で來る會せる全團員が一齊に天の一方を指し正義を誓ふ誓文を齊唱し最後七千餘の滿洲國旗に正義團と印したる手旗を分與し樂士滿洲國の彌榮萬歳を叫びて式を終つたが實に滿洲國空前の賑ひを呈し一大偉觀であつた。



對盟主訓示新入團代表員朗讀誓文  
(盟主の訓示に對し新加入團代表員の誓文朗讀)



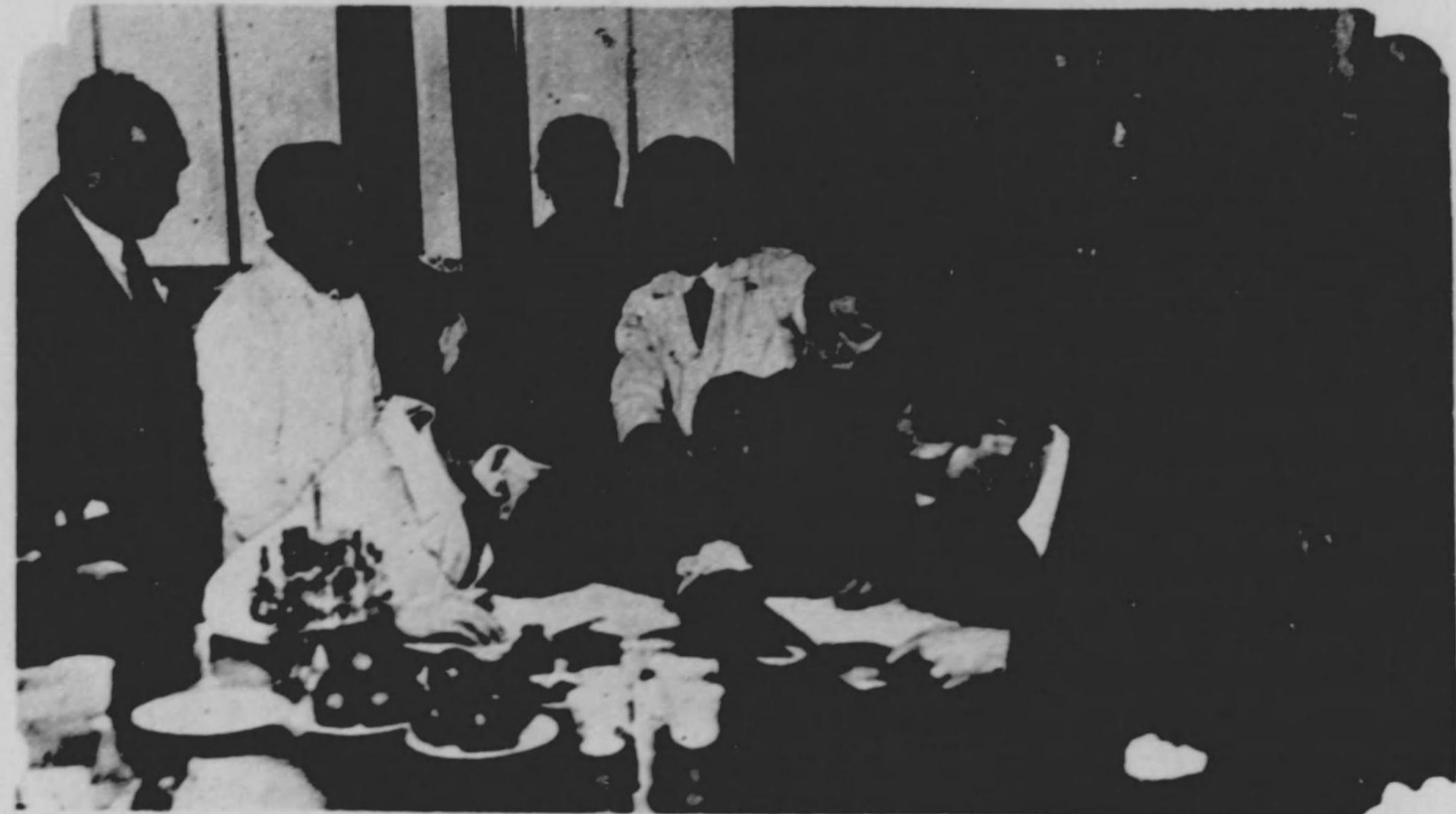
盟主依端奉向對員團體全體盤大捧手名二士力上壇祭  
況景「之也天者義正」號口特獨團本須唱齊一揮指  
指の盟主は員團全に向に奉盤大の鯛鮮たれらけ捧りよに名二士力に上壇祭)  
(ることを行を須唱の特獨團本に齊一と「りあに天つーくたは義正」りよに揮

(滿文)

此爲大同二年四月中新入團者約七千名於五月二十八日在奉天城外小河沿萬泉園體育場舉行莊嚴之入團宣誓式因數在七千餘衆故變更原來之誓杯式採用本團獨特之新方法使之齊入團宣誓首由盟主指揮到場之全體團員齊指天以示正義合唱誓文最後分發七千餘滿洲國旗印有正義團字樣執旗唱頌滿洲國樂士繁盛萬歳而式歸終此舉殊呈滿洲國空前之一壯觀也



(一其) 班療施團義正洲滿大



療診之班療施廻巡部支屯姑皇天奉在

(二其) 班療施團義正洲滿大



療診之班療施廻巡部支縣樹梨在

(滿文)

大滿洲正義團施療班之創設

大滿洲正義團所預想中之巡回施療班今次奉天本部業經創設矣此爲全滿各地一般團員涵養衛生保健思想計及對於貧困、無力治療購取藥餌者免費診治起見而設施亦即本團基於慈悲仁俠之至誠與普及王道精神爲目的披瀝互相扶助之一也第一期於大同三年一月起始按奉天本部所屬各支部所在地巡回施療其成績頗良好多得一般寄來之讚辭

按此巡回施療班以醫師助手看護婦藥劑師等五六名組成之限於團員之家族施醫施藥爲旨如有支部長及鄉屯村長證明一般貧困者亦得免費診治其第一次巡回地址如次

四平街支部、梨樹縣支部、奉天市內及皇姑屯支部、奉天市內工業區支部、開原城內支部、西豐支部

(日文)

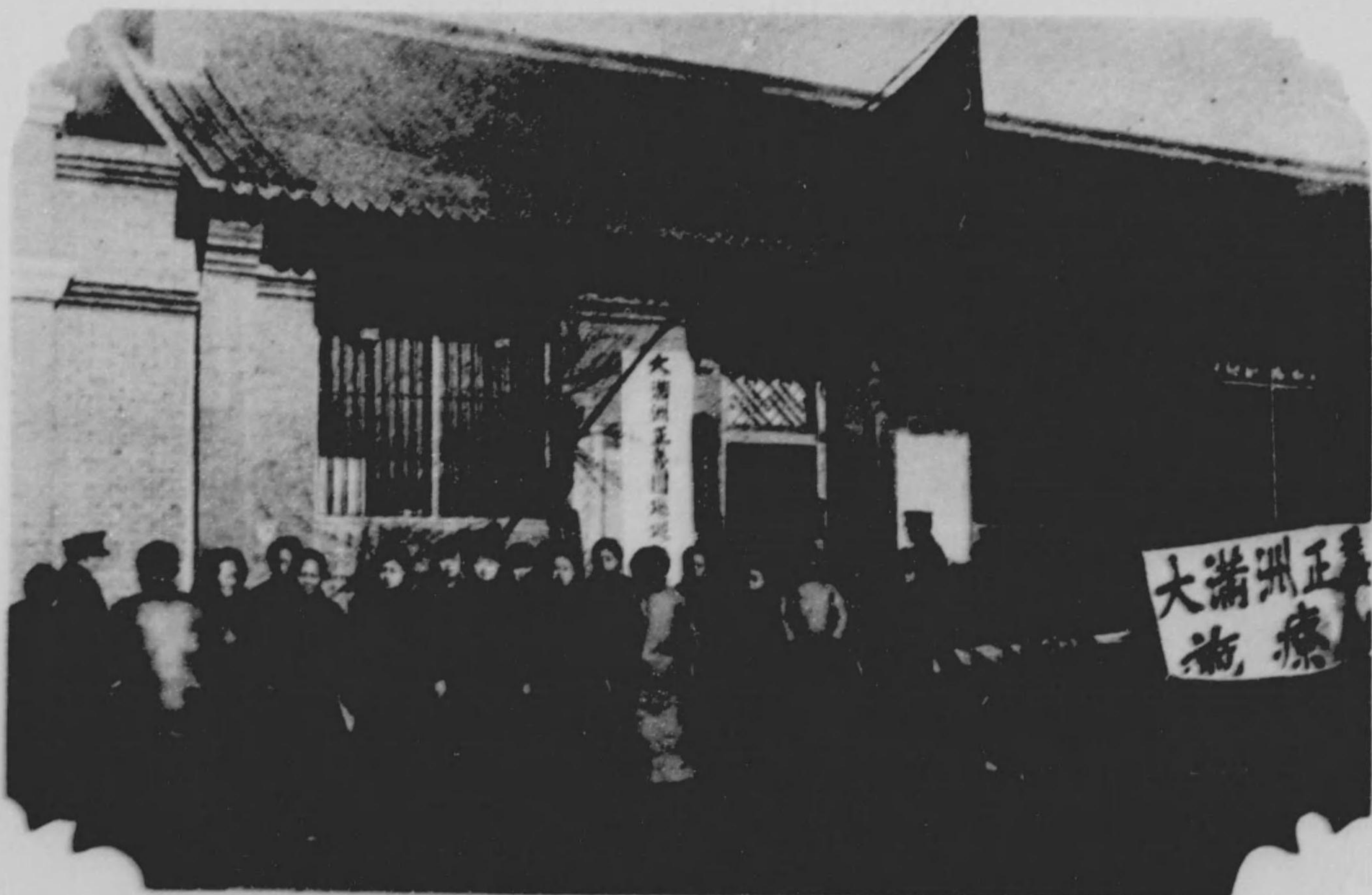
大滿洲正義團施療班創設

大滿洲正義團では、豫てからの懸案であつた巡回施療班を今回奉天本部を根據として創設した。

これは奉天を中心として一般地方團員の衛生保健思想の涵養を計る傍ら團外貧困者にして治療、藥餌を得られない者に對して、診療、治療を無料に行ふものであつて、即ち本團の慈悲仁俠の赤誠と王道精神普及の目的に基き相互扶助の一端を披瀝するものであり、先づその第一期として大同三年一月中各支部所在地を巡回施療せしめたが、成績極めて良好で一般から多大の讚辭を寄せられた。

巡回施療班は醫師、助手、看護婦、藥劑師等五六名を以て組織され成るべく團員の家族に限つて施療施藥を爲すが本旨なるも、支部長及び市町村長の證明ある一般貧困者に對しても特に無料取扱ひを爲すものである。その第一期巡回箇所は次の如くである。

四平街支部、梨樹縣支部、奉天市內及皇姑屯支部、奉天市內工場區支部、開原城內支部、西豐支部



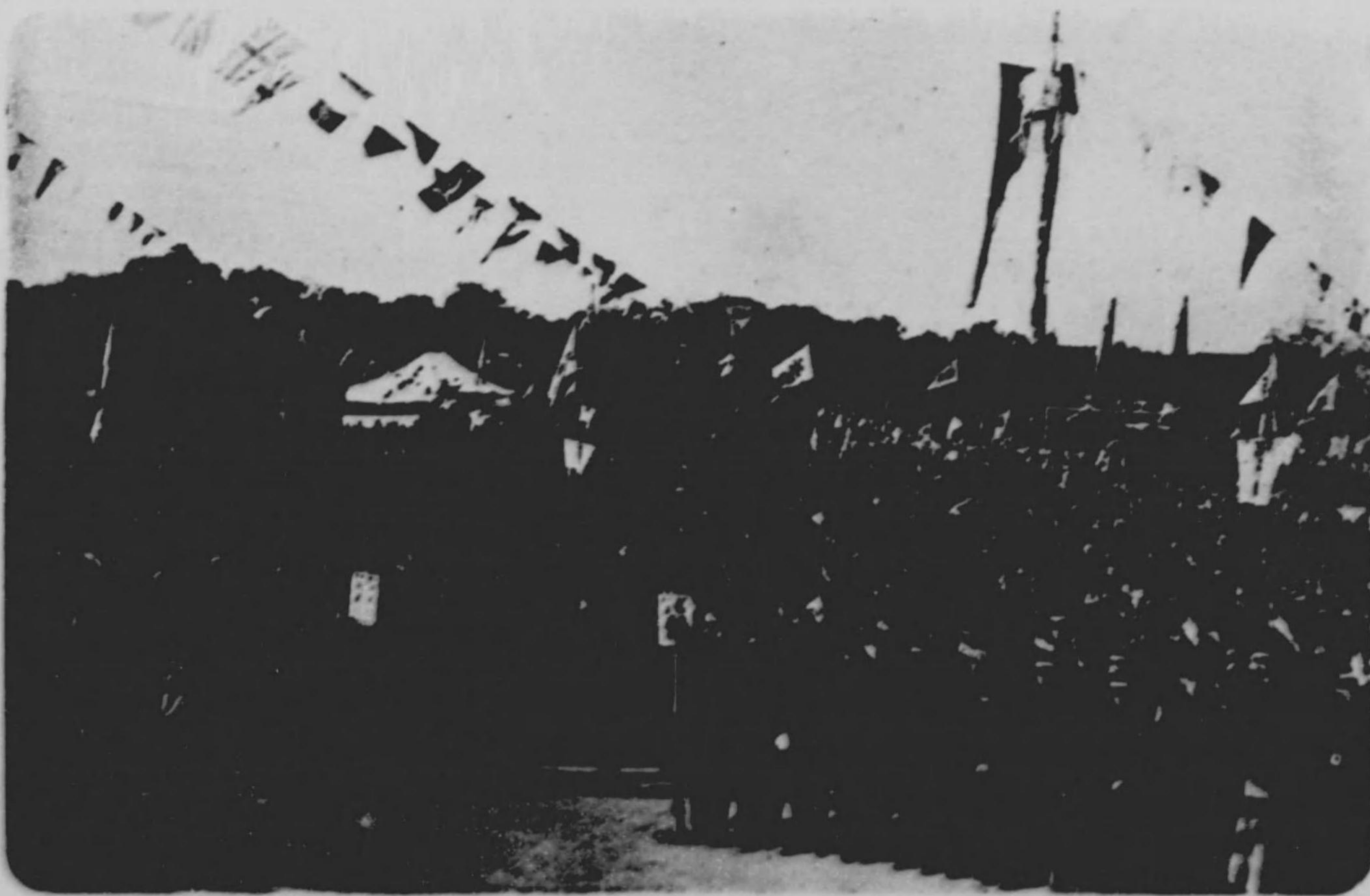
ちた者思るす到殺に班療施廻巡部支屯姑皇天奉



賀祝年周一國本並國洲滿認承

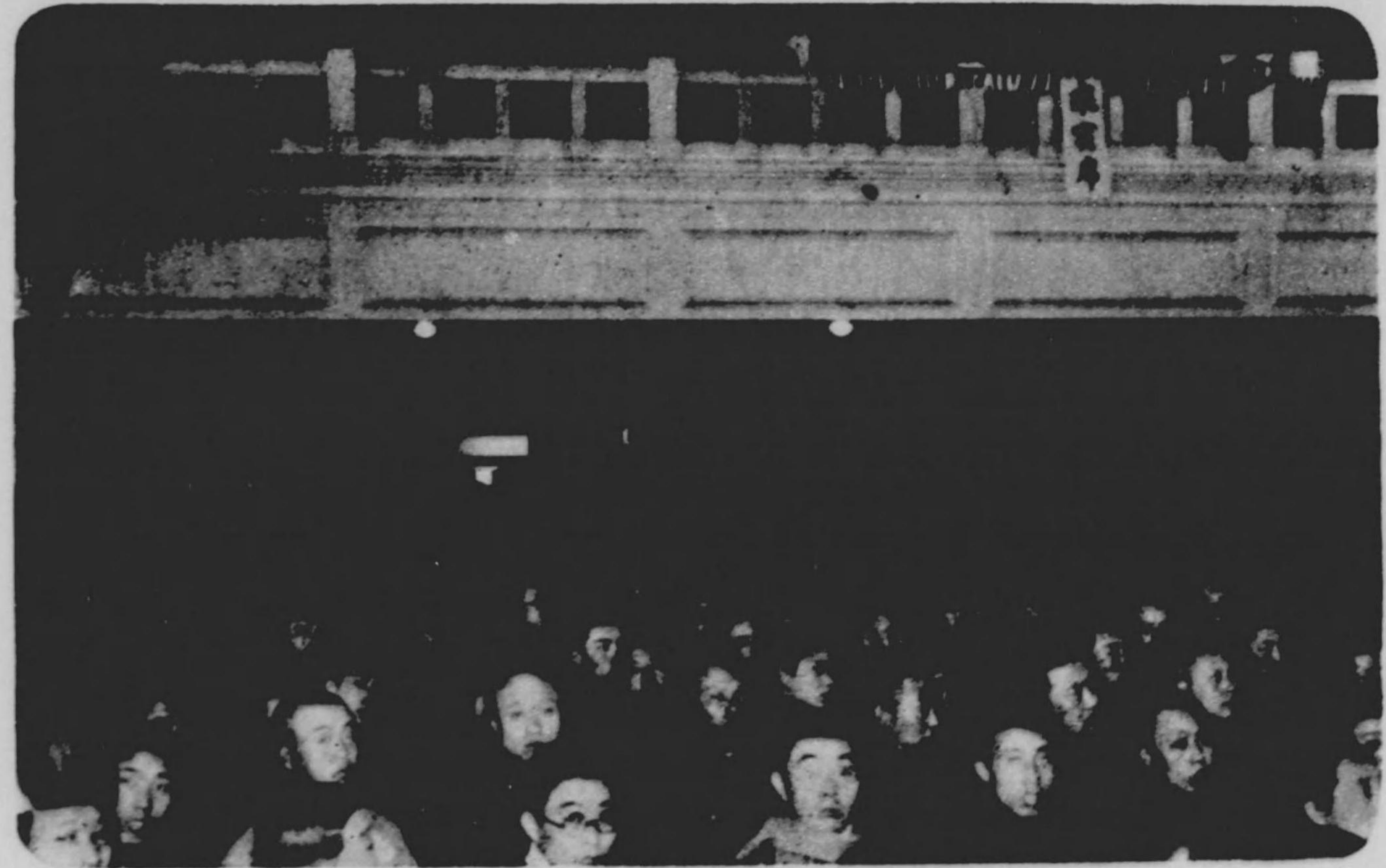


頌唱之盟主



員團加參の餘萬るす頌唱け衆を手に齊一り依に聲發の盟主

催開之會大民國



(應務警天奉於)——觀盛之列熱會大民國

(滿文) 大滿洲正義團第二回宣誓式臨終時所有參加者數千名從滿洲國人之勳議假此大會以聯開滿洲國々民大會而校正國際聯盟對於滿洲國認識之不足當宣言決議經滿場一致表決遂向日內瓦聯盟總會各國代表致電焉決議文如左

決議

- 一、國際聯盟調查委員之報告中關於滿洲問題因認識不足曲解已極故吾等三千萬民衆對李敦報告絕對反對
- 一、國際聯盟萬一若有是認該報告時吾等抗爭到底以出最後之決心以上於大同元年十二月十九日滿洲國三千萬民衆代表總會而決議者

大滿洲國國民大會

- 議長 安 祥 委員 季 景 林
- 委員 干 海 波 委員 干 振 閣
- 委員 孫 香 圃

(日文) 大滿洲正義團第二回宣誓式直後參集せる數千の滿洲國人は勳議を提出して本大會を滿洲國々民大會とし國際聯盟の滿洲國に對する認識不足を是正するため宣言決議を滿場一致可決してジュネーヴの聯盟總會各國代表にこれを打電した、決議文は左の如くである。

決議

- 一、國際聯盟調查委員の報告中滿洲國問題に關しては認識不足に基く曲解甚し、仍て吾等三千萬民衆はリットン報告に對し絕對に反對す。
  - 一、國際聯盟にして萬一此の報告を是認するが如き事あらば吾等は能くまで抗爭する最後の決意を有す。
- 右大同元年十二月十九日滿洲國三千萬民衆代表總會に於て決議す

大滿洲國國民大會

- 議長 安 祥 委員 季 景 林
- 委員 干 海 波 委員 干 振 閣
- 委員 孫 香 圃



部本滿北之設新濱爾哈於

(滿文) 本團除分有奉天新京兩本部外爲統制指導全滿各地團員起見已設置多數支部更於北滿方面以統制團員關係在國際都市哈爾濱從新創設北滿本部亦依滿國人有熱烈渴望歡迎之情而在地活躍也



(事 理 務 常 林 小 央 中)

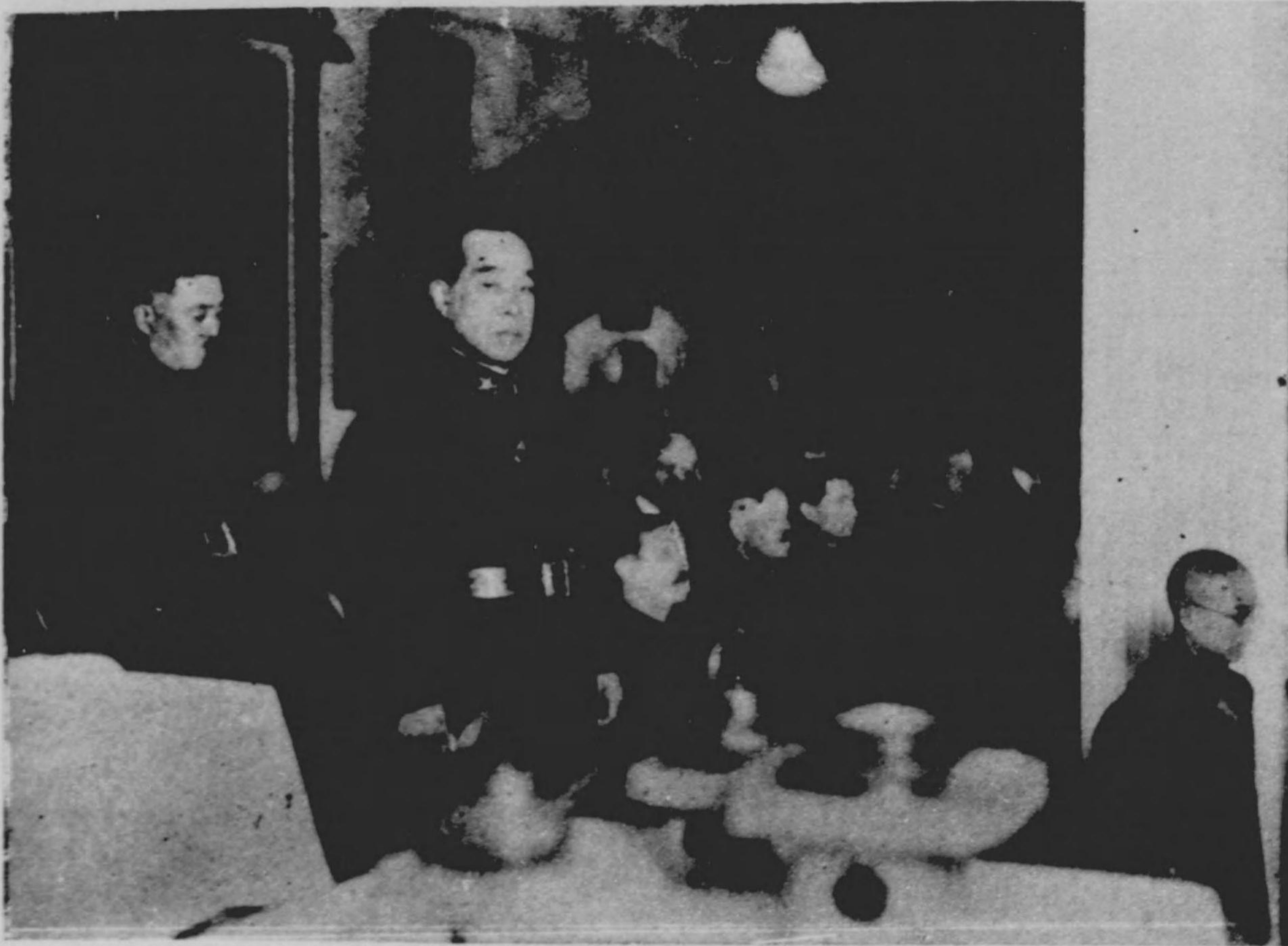
(日文) 本團は奉天、新京兩本部の外に全滿各地團員の統制指導のため多數の支部を設置したが、北滿方面に於ける團員統率上の關係から國際都市たるハルビンに、新に北滿本部を創設、滿洲國人から非常な歡迎と待望をもつて迎へられ着々として活躍の地歩を占めつつある。



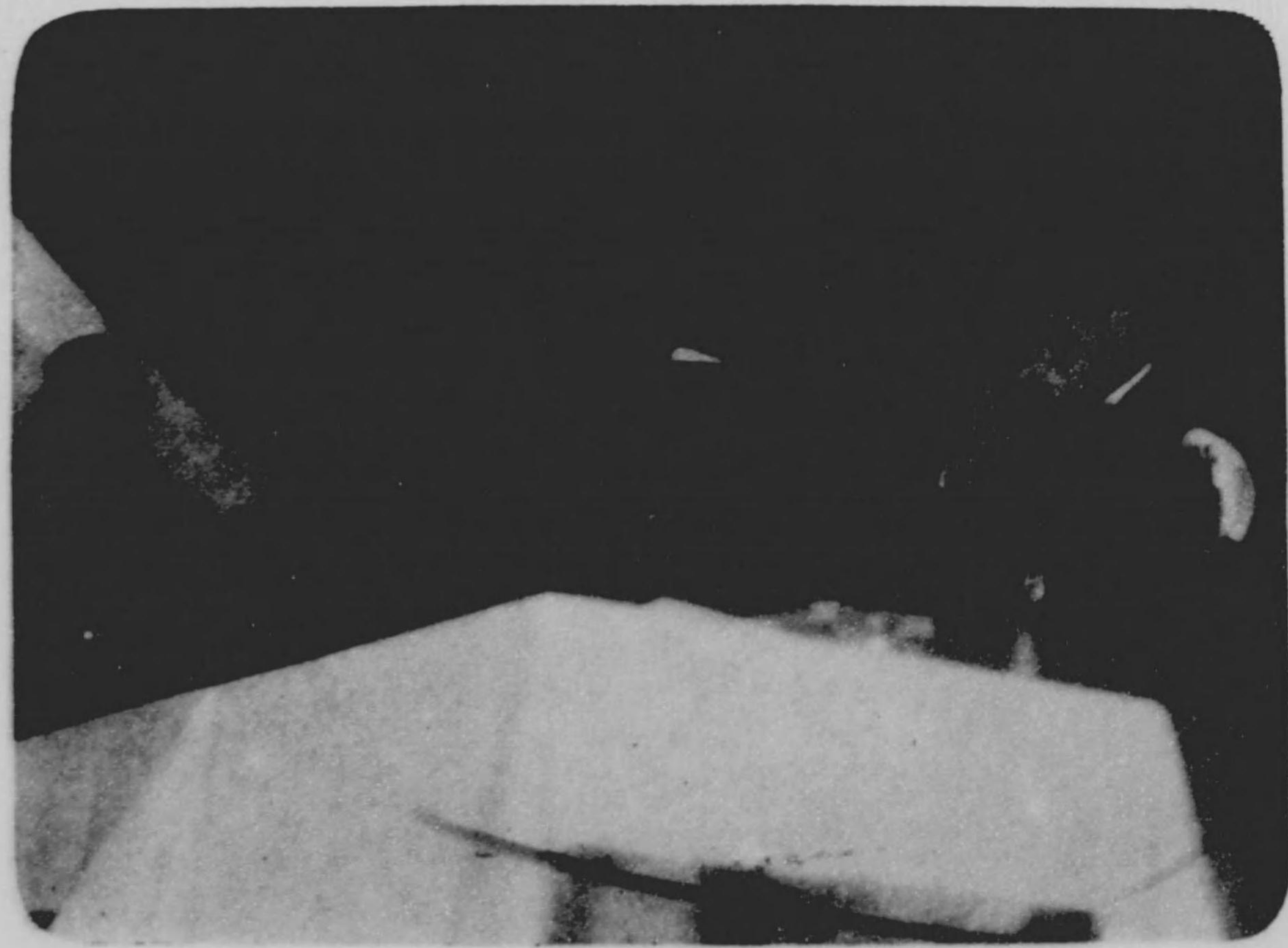
唱頌の員團新るせ狂熱るけ於に式盃誓

(一其) 式盃誓濱爾哈於

(滿文) 西曆千九百十七年(大正六年)因露西亞革命世界各國亡命之白系俄人參加本團獨得誓盃式依酒井主盟受盃 北滿本部因感動本團之主義精神入盟者達一萬餘人之等白系俄人參加本團獨得誓盃式依酒井主盟受盃



ちた部幹人露系白るす禱祈に神を事きべす徹貫の義正



盃誓の前神の者團入人露系白

(日文) 西曆千九百十七年(大正六年)露國革命に依つて世界各國に亡命せし白系露人は約三百萬人にして其の内四萬八千人は現在北滿に住居を定む。我が大滿洲正義團北滿本部創設するに本團の主義精神に感動し北滿本部へ入團申込の懇情を受け許可を與へられし者壹萬餘人に達す是等の白系露人は本團獨特の誓盃式に参加し神前に於て酒井主盟より各々受盃を了した。



(二其) 式盃誓濱爾哈於



他其軍將ンイツーリスキ部幹部人露系白と盟主井酒



景光の唱齊呼指の特獨團本後式盃誓



閱檢を員團部人露系白で頭街ンビルハが盟主井酒

大滿洲正義國の回顧

前掲寫眞は滿洲建國當時、わが正義團の活躍狀況を蒐録せるものでありますが、後掲我「大滿洲正義國の回顧」は酒井主盟が昭和十二年七月二十三日、大阪市電氣局に於てなせる口演筆記の一部分でありまして、滿洲人支那人心理の一端を御諒解下さることが出来るかと存じ採録いたしました。御参考までに御一讀下さらば幸ひと存じます。

せう

「酒井さん

と挨拶を致

し

ました。

「滿洲建國

の

私

の

滿洲

と

ス

ル

は

私

の

滿洲

を

建

國

の

回

顧

を

御

諒

解

下

さ

ら

讀下さらば幸ひと存じます。

御一

讀

下

さ

ら

ば

幸

ひ

と

存

じ

ま

す

。

御

一

讀

下

さ

ら

ば

幸

ひ

と

存

じ

ま

す

讀下さらば幸ひと存じます。

御一

讀

下

さ

ら

ば

幸

ひ

と

存

じ

ま

す

。

御

一

讀

下

さ

ら

ば

幸

ひ

と

存

じ

ま

す

讀下さらば幸ひと存じます。

御一

讀

下

さ

ら

ば

幸

ひ

と

存

じ

ま

す

。

御

一

讀

下

さ

ら

ば

幸

ひ

と

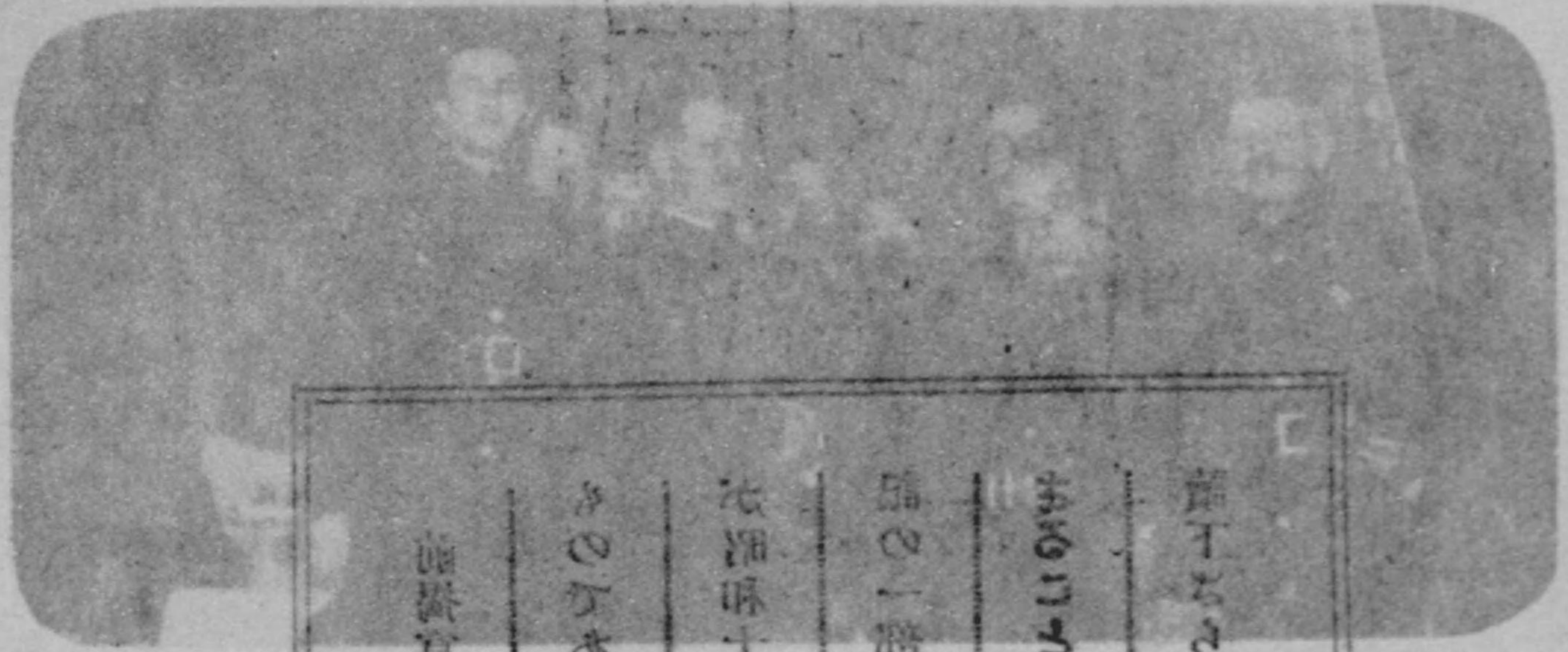
存

じ

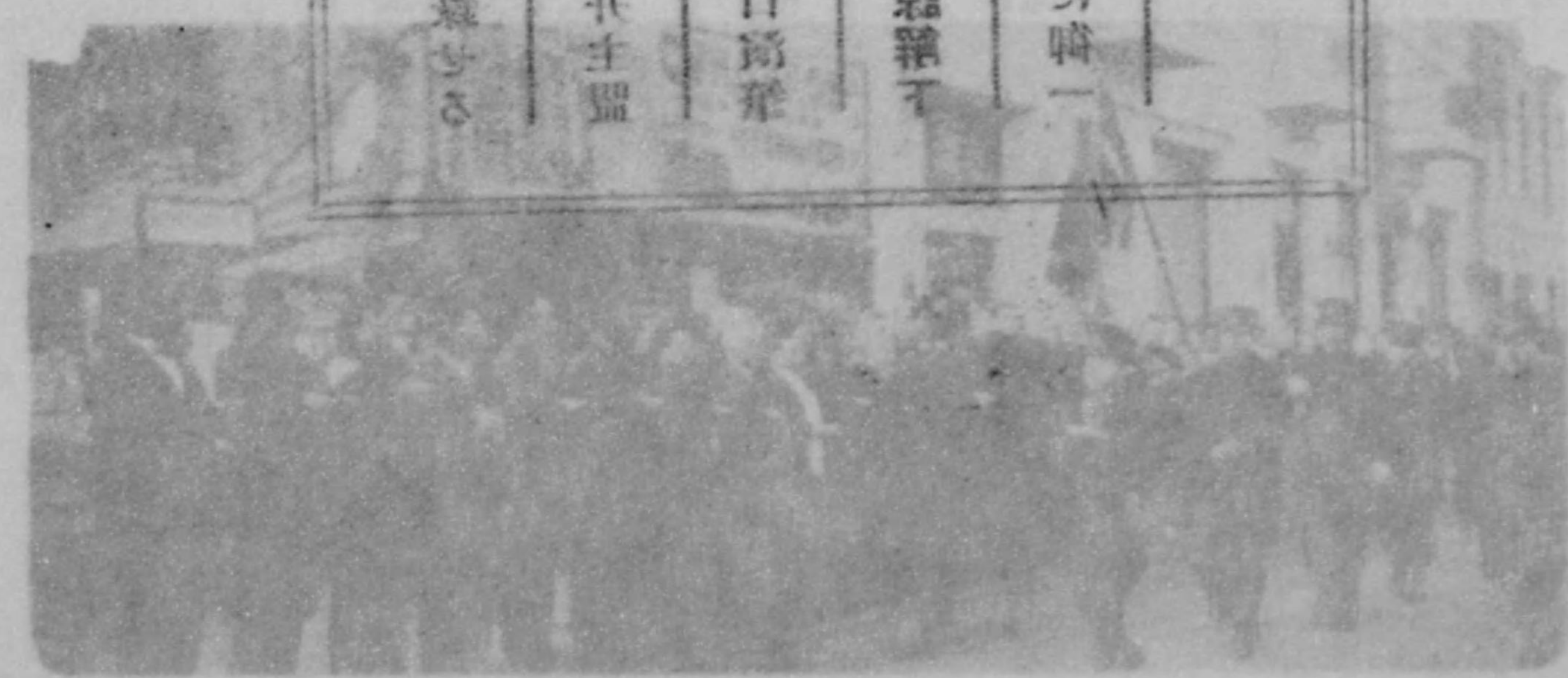
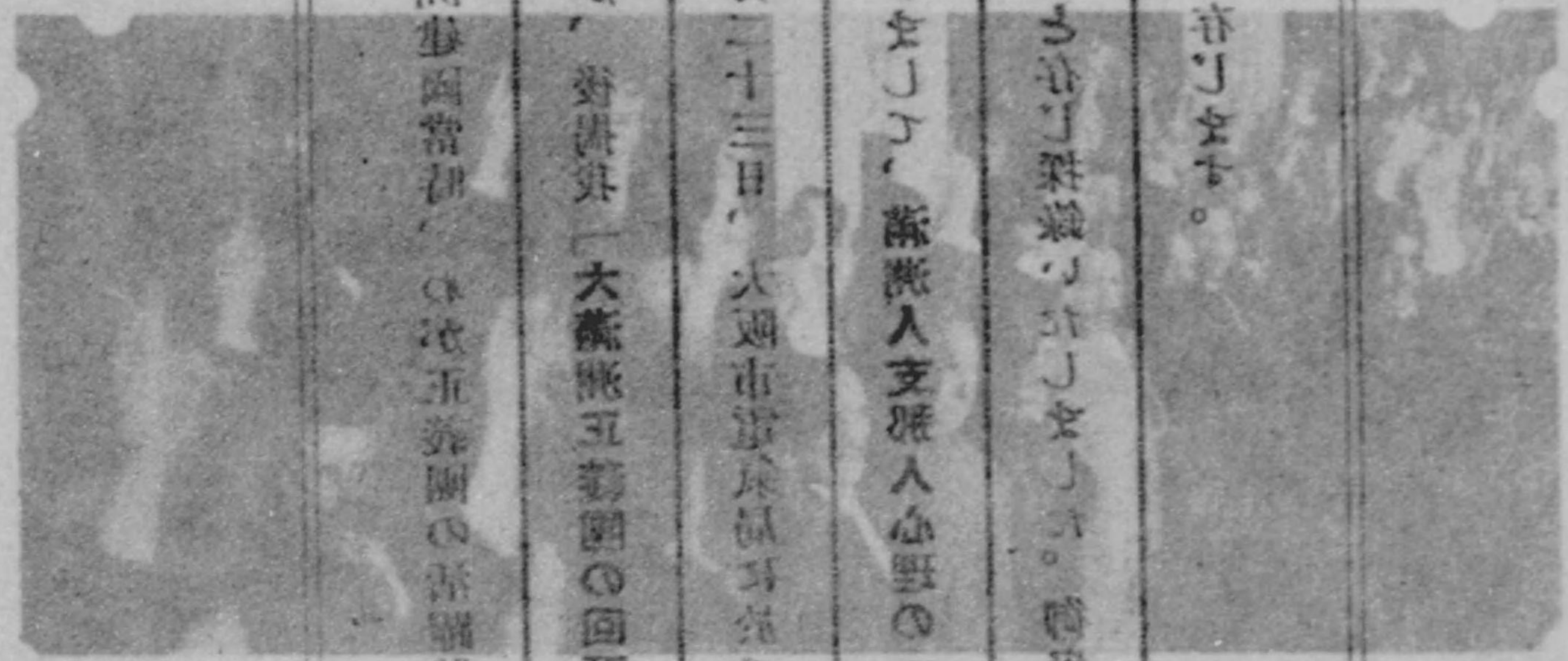
ま

す





前丁と對幸はる音す。  
 此の一事は出来ると言ひ難い事なり。情なきをて言ひ  
 此の一事は出来ると言ひ難い事なり。情なきをて言ひ  
 此の一事は出来ると言ひ難い事なり。情なきをて言ひ  
 此の一事は出来ると言ひ難い事なり。情なきをて言ひ  
 此の一事は出来ると言ひ難い事なり。情なきをて言ひ  
 此の一事は出来ると言ひ難い事なり。情なきをて言ひ



蘭哈を員部人國系白の部部シルハが主井酒

# 大滿洲正義團の回顧

主盟 酒 井 榮 藏

總理鄭孝胥氏の言葉に感激す



私の滿洲國へ行つたのは昭和七年の三月、まだ建國創業の慌だしい春でした。  
 各要路の日滿人を歴訪しまして、しまひに總理大臣の鄭孝胥氏に  
 私はその時先づ一番に  
 祝ひ致します」

「酒井さん、御祝ひにあづかつて有難いですが、この國は一體この先どうなるで  
 せう」





と云ふのです。それで私は

「どうなるといつたつて立派な獨立國として基礎を固め、これから世界的に發展向上するのちやありませんか」

と答へると、鄭氏は

「だがね、それは話で實際はどうでせう。この國は底抜けですからね。その底たるや何時の世に出来るか、見透しがつきませんや」

との返事です。私は

「底とは何のことですか」

と質問すると、鄭氏は

「それはですね、滿洲國といふ政府の形だけはこゝに出来てはをりますけれども三千萬の民衆が、「この國は我が國土、我が滿洲國なり」といふ自信がつくでせうか。我が滿洲國といふ自信がつかない以上は愛國心といふものが起きて來ませ

ん。愛國心のない國民は幾千萬あつたとてそれは底抜けでせう」

と云ふのです。私は

「ホウ、妙なことを仰しやいますな。それはあなた國民に國の有難さを知らしめれば獨りで愛國心は起きて來るでせう。これから國家の有難さを知らしめるにはあなた方が御努力下さつて然るべきと存じますが——」

と申しますと、鄭氏は

「それは御尤もですが、滿洲國の民衆といふものは、まあ第一日本内地からも朝鮮からも、蒙古からも、支那からも各地から集つて將來益々ごつちやになります。さういふ中に於てですから、私共はこれを如何とも施す術を知りません。これは役人や政府の力ちやいけませんな。やつぱり酒井さん、あなた方が來て、そして他の國のことはすて、おいても先づ日本人と滿洲人は手を握り合つて、温い親善でゆくやうに御盡力願ひたいものだと思ひます」



と答へる。私は

「なるほど御説ですが、然し風俗、人情自ら異にしてをる事故、御國の人には御國の人、日本人はやはり日本人でなければ、なか／＼さういふことは巧くゆくものぢやないです」

とかう言ひました。すると鄭氏は

「いや違ひます。誠の人類の愛に國境などはあるわけのものぢやありません。その證據には釋迦如來はどここの生れでせう」

「あれは印度人ぢやありませんか」

「左様、その印度の人をお國でも合掌すれば、私の國の人も手を合せます。又キリストはユダヤ人といひますが、世界の人はこの神様を信仰致します。ですから國が違ふから人情が違ふ。それは人間の言ふことです。誠の正義ではそんな國境などはあらう筈がありません」

といふから、私は

「あゝ御尤もです。が、どうも日本人とお國の人とは餘程性質を異にしてをりますから——」

鄭氏は

「性質が變つてをりますか」

私は

「變つてゐます」

鄭氏「どう變つてゐます？」

私は「詳しいことは知りませんが露骨に申上げると、お國の方は金以外何物も顧みないといふ性質をもつてをるやうですな。日本人も金は欲しがるとは欲しがります。けれどもイザ國家有事となると、金はおろか、妻子も家もその身もすてて國に報ずるといふ大和民族獨得の精神を持つてをります。それとこれとは大變



趣を異にしてをりますから、私共の手には及びませんね」と申しますと、鄭氏曰く

「妙なことを仰しやいます。それはあなた天性と仰しやいますが、天の神様が心も身も盡されたのに、支那人と日本人と區別してお拵らへになつたでせうか。それは私には判らん。そんな區別をして神様がお拵らへになる筈がない。あなたは境遇と履き違へてゐる。境遇とはまあ先づ第一に満洲であらうとアメリカであらうとあなたが、大手を振つて歩けるのは、誰れを頼みとしてゐるでせうか。それはお國の主權者、天皇陛下があらせられるでせう。國が他國より壓迫せられた時、軍隊あり、我を保護するものは到る處に警察あり、と云ふ風になつて居ります。無論、この國にも支那にもそれはあるのですけれども、事實と違つて國民が政府の有難さを知らず、頼りにすべき政府を一番恐れてゐるといふ境遇です。その次に國を守るべき軍隊と來た日には、軍閥程非道に國民を虐めてをりました。これ

は隠れもない大きな事實です。警察などは表と裏とまるで違つて鼻もちにもなりません。その上に馬賊が出る。かういふ有様だから己れを守るものは己れ以外にない。その力と頼むものは金なり、こゝへ來なければ仕様がなから來てをるのであります。だが、動物でも可愛がつてやれば尻尾をふつて馴れ親しむ。まして人間である以上は嬉しいこと、悲しいこと、恩義と恨みをよく知つてはをります。が、恩を感じる迄誰か愛護してやつた人がありませうか」とかう突込んで來たので、私は

「これはどうもそこ迄研究は致してをりませんでした。たゞ讀んだり聞いたりしたその儘を率直に申上げた迄であります」

と答へましたが、鄭氏は

「いや、それはあなた一人ではありません。皆さういふことを言ふのです。決して人間には正義、誠の届かざるものはございません。だから酒井さん、まあ兎に



角、これが天の神様の仕損ひか、境遇の生んだ現れで哀れな國民であるかといふことを、此の國へお出で下さつて御配慮願へば日滿兩國のためになると思ひますから—」

かういふ話であつた。

私は

「よくわかりました。日滿兩國のためになることならば微力は惜しみません。よく考へましてそのうちに伺ひます」といふて別れました。

### 愈々滿洲國乗出しの決意を固む

その儘日本に歸りまして、陸軍省へまゐりました。その時の陸相は荒木さんです。荒木將軍が

「滿洲はどうだつた？」

「あなたには手にとるやうに各方面から御報告があるでせうから私から別に珍らしい御報告もございませんが、たゞ少し氣にかゝることを聞かされて困つてをります。實は鄭孝胥氏がこれ—のことを言ひました」とかう述べました。

「それは一つすぐ行つてやつてくれんか」

といはれた。然し私は

(さう輕々しく行けるものぢやない)と考へて居ると

「いや、我が國は世界各國、國際聯盟に對しても、滿洲問題については領土的野心があつての行爲ぢやない。權益擁護のため、居留民庇護のためにやむなくこゝに至つたのであるといふことを聲明してをる以上は滿洲國をとるわけにはゆかない。滿洲國は獨立國として飽く迄存立させなくちやならぬ。ところが總理大臣た



る鄭孝胥ほどの人が現状を悲觀して辭表を出してやめられでもしたら騒動だ。獨りでに滿洲國政府は消えてしまふぢやないか。さうなれば日本から投じた二十億の富と十萬の犠牲者はファイになつてしまふ。東亞の安定、平和の礎石はどうなるのだ。理窟なんかは抜きにして、まあ兎に角、かうしてほしいといふことを、ああよろしい」と皆が總がかりでやつてくれなければならぬ。國家のためだから是非頼む」

かういふわけです。それから「考へませう」と言つて、小磯次官にその話をする。「是非行つて遣るがよからう」と勧められた。

戻つて来て私の關係の會社で話しても

「會社のことは社長のお留守中でも不都合のないやうにしますから」

と算盤弾く商人に迄激勵されたので、愈々向ふへ乗込むことになりました。

ところがその當時の陸軍の若い人達の鼻息といふものは、そんなボンヤリした

考へぢやない。たゞ機關銃で滿洲國をとつてしまつたといふやうな鼻息である。少し上の方と考へ方が違ふやうでありますから、若しも正義團と衝突してはならない。一應現地の人に話をしに行かうと思ひまして、それからその年の六月に再度奉天に行きまして本庄司令官に會見致しました。

「實は私がこちらへ来る考へならば、あれから奉天に引返してあなたと御相談して行くのでありましたけれども、滿洲へ来る考へでなかつたものだからすぐと日本に歸りました。ところが荒木將軍はかう言はれました。それで私がこちらへ来ていらぬ御世話だと邪魔物扱ひにせられては迷惑致しますから、あなたの御考へを聞かせて頂きにまゐりました」

と述べますと

「それは結構だが、實はな。こゝに協和會といふものを組織しようとしてをる。

それと衝突しやせんだらうか」



「協和會か協和黨か知らないが、あなた方がつくるならば當然日滿兩國のためにつくるのでせう」

「無論さうだ」

「そんなら私も日滿兩國のために盡力しようとするのですから、落つれば同じ谷川の水です。變りはないでせう」

將軍は

「それはまあさうだ。だが、併し金は要るだらう」

私は

「金のことは考へてゐませんが、永いことの御奉公は出来ませんけれども自費を以てまあ半年位はやつてみようと思ひます」

「そんなら何分頼む」

かふ本庄司令官との話が纏りまして、橋本虎之助少將が參謀長、當時大佐であり

ました板垣さん、(今の中將)それから今少將になつてゐます石原さん、その時は中佐で作戰課長でした——。私は新京、當時の長春へ參り、國務院へ行つて、駒井徳三さんが長官の時でしたが、それらの人々にその譯を話して、その模様を一寸視察しますと、なるほど團體、結社は澤山つくられてゐます。民間からも宗教家からも作られました、第一紅卍教などは今なほえらい勢力であります。その他、先年叩きつぶされた大本教とか、また眞言宗といふやうないろ／＼なものがあるやうです。それをジツと調査を致しますと、日本人が主となつてやつてゐるものにはどうも滿洲人が信をおいてゐない傾きがありました。これは無論滿洲人と申しましても、本當の滿洲人は非常に少く大部分は皆支那人です。支那からドン／＼流れ込んで行つたのが今三千万とか、四千萬と申してをります。そこで一般の者はどうしても信を置いて居ないと云ふ事が分りました。これは日本人から申しますと、日本人と支那人はまるで男と女ですね。女といふものは御承知



の通り疑ぐり深い、何故疑ぐり深いか、原理は弱いからである。萬一のことを慮り取越苦勞するのが女です。それ故弱い、恰度支那がそれです。結論は弱いからですが、日本人と約束しておいても若し間違つた處で一つボンとやられたらそれで終ひだから、と要心深くなり、自然避けると云ふ氣になります。だから親善というても容易ぢやありません。先程申上げた通り親切らしい言葉だとか、言葉巧みに用ひれば、向ふの方はチャンと知つてをります。本當のものでなければならぬ。本當のものは何かといふと、無論至誠です。己れといふものを離れて相手を助けてやる一方にやらなければなりません。

#### 當時の滿洲國人の日常生活

そこで滿洲人の日常の模様をみてみますと、生活上のことにはあまり困難しません。たいていのものでも粗食に甘んじてよく働きますから見榮を飾ることは絶

對ありません。それで満足して金のあるものもないやうな顔をしてをりますが、相當に金をもつてをるものもあります。たゞ彼等が日々悲しむことは無理の要求と、壓迫ですな。例へばあの事變當時に内地から酷く嫌はれる滿洲ゴロといふあゝいふ連中は一時なかつたのですが、事變後はさうした類似のものがズツと流れ込んで行つた。滿洲で金が轉んでゐるものゝ如く考へて、行つて見るとそんな事がどこにあらう。そこで甚しきに至つては一挺擔いで馬賊仲間に入るといふ日本人も出來た。それが非常に無法なことをやる。一例を挙げるとかういふことがある。憲兵の密偵だの、警察の密偵は主に滿洲人だとか、朝鮮人を使つてゐる。言葉がうまいんですからね。そいつらは金のありさうな人間とみれば、すぐ嘘を言うて密告致します。反滿行爲云々といふやうなことを言うて密告します。書類が出た以上というものはその儘に放任するわけにゆきませんから、一應本人を引つばつて來て取調べる。すぐ取調べてやればよいが、さうはいかないからガチャン



と入れておきます。さうすると、家族が心配してをるところへその密偵がやつて来て

「あなたの方の主人は引つばられて行つた。二、三日放つておくと命がない。金を出せ、運動してやる」

「私の主人は悪いことをした覚えがない」

「悪いことをしてもせんでも、向うへ行つたら死んでしまふ。逆さに吊して鼻から水をさして白状させる。そんなものやさしいものではない。今ぢや椅子へ腰かけさしてスイッチをひねると電氣が来る。さうすると骨と肉が離れて苦しい。苦しいから何だつて構はない、その通りだといつてしまふ。さうした揚句には、もう歸つて来たつて身體は役に立たなくなる」

かういう風に威すから家族はワーと泣く。

「金を出せ」

幾ら出したらよいかといふ。ダン／＼と多い奴が五千圓、八千圓といふことで、それは随分亂暴なことです。私の方でそいつを助けたことありますが、さういふ細かいことは捨ておきまして、そんな悪いことをやります。此の反面には必ず日本の浪人が策動して居ります。家主でも家賃を一寸しるしだけに打つておいて入り込んだら最後、なか／＼二年も三年も出ない。グズ／＼言つたら三年ぶり家賃を立ち退き料にとらなければ出ぬといふ悪い奴がある。ところがそんな奴を何故警察や領事館や裁判所などで放つてあるのかといふと、悲しいことには警察なんか證據が具備せなければ檢束出来ない。ところが満洲ゴロのえらい奴になつて来ると悪い尻尾を握られるやうな下手なことはやりません。そこでもつて上手に悪いこと巧みにやつて居るから、上の方では其の當時はそんな小さいところに考へは及ぼしてゐない。下ツ端にまかしてある。下ツ端の方では金さへ出せばどうでもなると云つた様に總て複雑を極めて居りました。そこへ酒井が行き合はせたの



で今後どうすればこれを助けることが出来るか知らん、我々には警察権はないから悪い奴は知つてを つてもふん搦まへることが出来ない。そこでどうするかについて考へた結果、仕様がなから正邪の判別を正すには邪と正と戦ふの外はない。此奴が曲つたことをしてをると思つたら正しい立場からさういふことはしてはいけない、日滿兩國のためによせというて忠告をしてやる。聞かなかつたらひつばたいてやる。すると喧嘩が出来る。兩方とも検束される。併しこれくの事情でかういふことをやつたと裁判で言うたならばそれでそのことが明かになる。新聞記者も亦書き出せば輿論が動くであらうといふやうな、まあ淺墓な考へか知れませんが、咄嗟のみぎりさういふことしか考へが出来なかつた。

### 主盟自ら選抜團員を率ゐて渡滿

そこで早速日本へ歸りまして、不肖私に殉じて一命をすてゝもよいといふ青年

を二十歳から二十五歳のなるべく妻子のない者がよいといふので正義團に志願者を募集致しました。六百何名か出たやうでした。そのうち百名だけ銚衝して身體検査を致し、初めて連れて行きましたのは、七年の八月五日、ばいかる丸で神戸を出發致しました。

さて向ふへ行きましてからは、どうも青年を遊ばしておくといふと喧嘩をする。これはいかんと思ひました。みんなに、毎日仕事をさせなくちやならんが、然し仕事をさせるといつたつて仕事がありません。その當時ですから、まあ一つ軍事教練をしたらよからうといふので、本庄將軍に話して、鐵砲百挺と彈丸一萬發をもらひました。それを青年に擔がして行軍する。射撃をやる。時たま匪賊が出ると手傳つてやはり匪賊討伐に出るといふやうなことでズツト幾日か日を送つてをりますうちに、それを眺めた滿洲の人達、第一警察が驚きましたね。あれは何だらう。鐵砲擔いで歩いてゐる。日本の正義團といつて劍呑な奴が來よつたな、



専らさういふ噂でありました。それからいろいろなことがありますと同時に、私の方は満文でもつて「特に虐政、壓政で立つ能はずして苦しむ者は具申せよ、正邪判別は立ち所に明かにすべし」といふやうな文句をば印刷してそいつを全満到る處にズツともう何十萬枚と撒きました。ところが初めはそれをみて面喰らつたやうでありました。それは今申上げる通り相手も人間、こつちも人間です。神ならでは人の心のわかる筈がない。信をおきません、が、そのうちに段々と日を重ねるに従つて判つて來た。そのうちの小さい事件を一つ御参考のために申上げておきます。いろいろ事件がありました、これは満人同士の關係であつたやうです。妻を娶るため結婚の結納金を納めた。ところがその婦人に情夫があつたためにどこかへ逃げてしまつた。ところがその結納金を返さないんです。それがため男はたまらないから正義團のやはり團員の一人として訴へて來たのでした。私はさういふ細かいことには關係しません、事務員の者が聞き取つて、そんな無茶

な話があるか、行けく取返してやる。さういつて取返してもつて歸らした、といふやうなわけですね。嬉し涙にくれて持つて歸つたさうです。その翌日満人が「主盟にお目にかゝりたい」といふて訪ねて來た。

「何の用だらう」

と本部の者に聞くと

「昨日かういふことを片付けてやりましたから、お禮に來たのでせう」

といふから應接間に通しました。すると満人はお金を前におきまして

「主盟、私はかういふことから正義團の本部の人のお世話になつて金を取返してもらひました」

「昨日聞いた」

「然るにその金を私が皆もらつていゝものでせうか。それをお聞きしたい」



と云ふから

「その金(かね)はもと誰(たれ)が出(だ)したのかい。お前(まえ)が出(だ)したのか」と問(ま)ふと

「ハイ、私(わたくし)が出(だ)しました」

「それならお前(まえ)が皆(みな)とつてよいのだ。どこにも分(ぶん)配(ぱい)する必要(ひつよう)はない」  
持(も)つて歸(かへ)つて良(よ)いのだと申(まを)し聞(き)けました處(ところ)

「でも私(わたくし)の力(ちから)で取(と)返(かへ)した金(かね)ぢやない」

「それはさうだけれども、それではどうしたらよいといふのか」と尋(たず)ねると

「これは半(はん)分(ぶん)貰(もら)つたら私(わたくし)はそれでよいと思(おも)ひます」

かういふ。

「そんな手(て)數(すう)料(りょう)とつて世(せ)話(わ)する場(ば)所(じょ)ぢやない。お前(まえ)は正(せい)義(ぎ)團(だん)に入(はい)つたのだらう。

正(せい)義(ぎ)の神(かみ)様(さま)は正(せい)邪(じや)の判(はん)別(べつ)を明(あき)かにされたのである。お前(まえ)の金(かね)を取(と)つて返(かへ)さない方(かた)が邪(じや)で悪(わる)い。不正(ふせい)なのである。ために正(せい)義(ぎ)が行(い)つてこれを取(と)返(かへ)してやつたのだから何(なん)にも遠(えん)慮(りよ)はいらない」

と云(い)つて聞(き)かせましたが、さあ、わかりませんね。幾(い)ら言(い)うてもわかりません  
わからないといふことは、支(し)那(な)の人民(じん)は他人(たにん)から只(ただ)助(たす)けてもらつた事(こと)は無(な)いので  
す。本(ほん)人(にん)は妙(めう)な話(わ)だと

「一(いち)晩(ばん)考(かう)へたけれども、不(ふ)思(し)議(ぎ)でかなはん」

といふのですね。それから私(わたくし)は困(こま)つたのです。

「それぢや貴(き)様(さま)、そんなに得(とく)心(しん)がゆかなければ寄(よ)附(つ)せよ。神(かみ)様(さま)へのお供(そな)へとして  
取(と)つてやらう」

それで漸(やうや)く得(とく)心(しん)が出來(で)た。妙(めう)なものだがさういふ考(かう)へです。これは日本(にっぽん)でもさう  
です。私(わたくし)は九州(きゅうしゅう)八(はち)幡(ばん)に一つの店(みせ)をもつてをりますが、いつか寒(さむ)い時(とき)でした。七十



餘の爺さんが擔ぎ八百屋をしてをる。

「いつも見る爺さんだが、あれはどうしたものだ」と訊くと

「立派ないゝ息子があつたのですが、製鐵所に働いてゐるうちに熔鑛爐で誤つて怪我してその養ひ子に死別し、あゝいふみすほらしい日を送つてをります。氣の毒なことだ」

といふのです。それから爺さん呼びまして菜ツ葉を買つて、若干の釣錢をとらないでやりますと

「これは一體どういふわけでございます」といふ。

「聞かんでもいゝよ。君がかゝり子に離れて非常に淋しい思ひをしてゐるので同情に堪へない」

といふと涙をこぼして泣いてをります。これがホテルのボーイであるとか、宿屋の女中にチツプをやりますと「ありがたうさま」というて禮はいひますが肚の中ちや當り前だと思つてをりますから、それほど感謝しない。ところが一方の貰ふ方が「これは何故だらう」

といふのです。これはさういふ境遇にゐないからさう考へるのです。中には

「酒井さん、あなたの考へ方は正しいが、どうせあいつ等は他人さんにする時にも只ですのちやないのだから」

といふことを言ふ人もありますが、併し金さへあればどんなことでも出来るといふて、つかんで走ると思ひの外、錢を貰つても意外にも情義のあることを發見したといふことを御参考のために申上げておくのであります。



軍のため本團員雷恒成監禁さる

それからもう一つ、支那人として非常に義を重んじてをるといふことの一例を申し上げます。それはもと陸軍中將で、滿洲事變前、中村少佐が殺された時分には憲兵司令官をしてをりました雷恒成といふものですが、この者が我が正義團へ入團して、それから一ヶ月位経ちまして奉天の憲兵隊に監禁されました、それを家族の者から訴へて來たので、私は何故であらうと思つた。然しそれは相當大物ですから、これは團員に調査さすわけにまゐりません。奉天憲兵隊長増岡中佐に自ら面會して

「あなたの方に雷恒成が監禁されてゐるのは事實ですか」

「ハイ監禁してをります」

「何の罪で監禁したのですか」

「それが俺の方もわからん」

「そんな變なことを言うては困る。罪のわからん奴が監禁出来るか」  
すると隊長が

「證據を見せてやる」

というてボタンを押すと曹長がやつて來ました。

「關東軍から雷恒成を監禁せよといふ命令書があるだらう」

「ございます」

「もつて來い」

やがてタイプライターで打つた書類をもつて來ました。見ますと、板垣征四郎少將——今の中將です。その時分は奉天の特務機關長でした——氏の名前で

「關東軍參謀長の意圖により當分、雷恒成を監禁すべし」  
といふ命令で、判が捺してある。



「かういふものが来て監禁したのだから僕の方ではわからない」といふ

「なるほど、それは失敬した。それでは何の理由で監禁したか、これは關東軍へ行かなくちやわからない。では私は行つて來ますから——」

といふので、そこを辭去してその足で新京に行き、その時の係は目下支那で盛んに活躍してをるあの駐在武官の喜多少將です。その時分は大佐で第二課長でした。その人に會ひました。

「喜多さん、あなたは雷恒成を監禁せよといふことを奉天の憲兵隊に命令しましたか」

「あゝ私といふわけぢやないが、關東軍からの命令です」

「何の罪ですか」

「別に罪はないのだが、それは——」

「一寸をかしいですな。罪なしであなたどうして監禁しますか」

「君はまたそれをほじくつて聞くのが妙だな」

「だつてあれは正義團の團員ですぜ。我々は正邪判別を明かにすべしといふことを發表してあります以上、罪あれば彼は除名します。罪なくして壓迫の下に監禁されて居れば彼を救うてやらなければならぬ約束であります」

「えらいむづかしいね、それぢや君だけに話さう。漏らしてはいけないぞ」

「冗談ぢやない。軍の祕密を漏らす奴がどこにある」

「實は近日熱河を討伐することを御承知だらう」

「知つてをります」

「あの熱河を討伐するに先立つて雷恒成を監禁したのは、彼は熱河はどの方から攻めてどう落してゆくといふことをスツカリ心得てをる。軍の方針を彼が呑み込んで知つてをるから、そのことを向ふに漏らされて、向ふで逆に出られたら大變



だから熱河討伐のすむ迄彼を監禁しておく」

かういふわけです。そこで私は

「それは妙ですなあ。曾て我輩に、今を去る一ヶ月ほど以前だと思ふ。ほめてもらはふと思つたものか、自分の誇りで言うたものか、それは知らないが、主盟、私は關東軍に對していゝものを差上げました」と云ふから、なんだ」と聞くと、今度熱河をやりますについて私は熱河の最も詳しい圖面を添へてこゝには毒ガスが伏せてある。こゝにはかういふ山があつて、この裏道を行つたらかういふことになるといふことをスツカリ出しておきました」と云ふから、さうか、それはいゝことをしてくれた。どうも有難う」これは今を去る一ヶ月前に聞いた事ですが、さうすると雷恒成が出しましたそれを採用するわけですなあ。そしてそれを出したことは國家のためにいゝことをしたと本人は思つてゐるのにそれを逆に監禁せられた事になるのですなあ。まあさう云ふ譯ですなあ、軍の機密だから仕方がな

いでせうが日本といふ國はさういふことをする國だと思はれちやよくないですなあ。あなた方はそれでよいか知らんが、私はこゝへ來たくて來たのぢやない。是非頼むといはれて來たのです。後々の事もありますから何とか考へてもらはなければ困ります」と隨分頑張つたものです。

### 雷恒成救出までの軍との交渉

そこで關東軍は會議を開きました。その結果翌日私に示されたのは

「雷恒成身柄引取りについて酒井榮藏の申し出でについては憲兵の裁量にこれを一任する」

かういふやうなことですな。

「これはチヨツと無理ぢやないですか、あなたの方からふん縛れと命令しておき



ながら憲兵の裁量に一任するといふのはどういふわけでせう」

「それは君、今はまだ熱河が片附かないのである。片附かない先に監禁せよといつて置いて片附かない先に又ほどこいてやれといふことは言へやしない。片附いてをれば問題はないが片附いてないのだからあなたが憲兵との間に話しあつて連れて歸つたからとて私の方で異議は言はない。かういふことに決議したのであるから。まあ憲兵の方へさう言うてありますから行つて下さい。これ以上のことは出来な  
5」

といふものですから、その當時の憲兵司令官は橋本虎之助さんです。この橋本少將に會つて話しました。ところが

「いや今關東軍から電話がありました、そんなことをしてもよいのか」

「大丈夫です。彼にも妻子もあります。秘密は漏さないやうに私は責任をもちます。萬一のことがあれば我輩の腹の一つや二つ切つても追付かないといふことは

知つてをります。だから出して下さい」

と懇談の結果、やつとのことで話を纏めまして

「ちや君にまかす。奉天の方へ電話でさういうておきます」

と承知して呉れましたので、喜んで別れました。それから汽車に乗つて奉天へ歸る道すがら少し考へました事は、自分の言ひ分の通つたことはいゝけれども、關東軍ではこの秘密を知るものは雷恒成以外に何者もないと心得てをるけれども、その他にまだ知つてをる者はあるかも知れない。その時にその者の口から漏れたものが全部雷恒成に疑ひがかゝるわけである。さうなれば責任上我輩も困る。これはウツカリ出しちやまづい、かういふ風にまあ氣づいたものですから、奉天へ着くなり早速に憲兵隊へ行きますと、増岡隊長は

「いや、司令部から電話がかゝりましたからどうぞ雷恒成は御隨意に」とかういふものですから



「いや、それはね、僕は車中でかう考へたのだが、隊長はどう思ふかと尋ねますと

「さうだな、そんなことが他から漏れて来て問題になつて來たら、雷恒成に疑ひがかゝるだらうな」

「そこだ、だからウツカリ出せやしない。それですからね、本人を僕に一遍會はしてくれませんか。當人によく得心さして、君のところへもつと預けておかう。それなら無難だらう」

といふので私が祕書を連れまして雷恒成が監禁されてをるところの分隊があります。その二階の一室に放り込まれてゐる、そこへ會ひに行きました。さうするとあれだけの大物ですから、ベッドの上へふんぞり返つて目をふさいでをりますが寢込んでをる筈がない。ガチャ／＼と鍵で上等兵があけて入つたがピリツとも動かないです。それから僕は傍へ行つて

「オイ、雷君、起きたらどうかね」

それから目をあけて、ハツと飛び起きて正義團の胸手の禮をやりました。それから敷島一本與へまして煙草をすはせました。

「雷さん、君、こゝへ來たのは何の罪で來たといふことを知つてをりますか」

「私は何にも悪いことをしません。何にも悪いことをした覚えはありません。更にわかりません。今日で七日の間といふもの、そればかり考へてをりますが、私はこゝへ入れられる覚えはないといふことに歸着しました」

「無論さうだらう、僕も君が罪があると思つて聞きに行つて罪のないことがわかつた。ところがね、よく研究するところ、君がをることは國家のためと雷君のためなんだ」

「それはどういふわけなんでせう」

「それはね、君がこの間關東軍へ祕密のことをば提供したな」



「え、致しました」

「そのことが早や蔣介石なり學良に聞えてをるぞ」

「さうですか」

「聞えてる。だから君に暗殺が廻つてをるぞ。だからね、危い、又君が殺されるならいゝが、殺されずに何かで眠らしておいて、後から責めて白状したりすると、それこそ騒動だ、だから國のため、雷君のためこゝへおいてある。但しさきにこれを君に言へばよいのだが、それは陸軍の祕密だから言へないと云ふ事になつてをるのだから安心せよ」

「さうですか、そんなことなら私も心配も何もするのぢやなかつたのですけれども今の今迄も日本の行爲を恨んで恨み抜いてをりました」

「それはさうだらう、無理はない。けれども、事情はさういふわけだから、又君を今連れて歸らうと思へば連れて歸れないこともないのだけれども、さうすると

後日何者かのために祕密が知れた場合、事毎に君に疑ひがかゝるから、一番安全なことはこゝにをるのに限るのだ」

「よくわかりました。どこへも行きません。但し私は、主盟、安心してドアから外へ出るといつても出ませんけれども、一つお願いがあります」

「なんだ」

「あのドアの出入の度毎にガチャ／＼と鍵をかけること、あれをやめてもらひたい。あれは罪あるもの以外にはせない筈、私は罪のないのに國家のためにこゝにをると定つてをるのに一々鍵をかける必要はないと思ひます、頗る氣分が悪い」

「なるほど、そんなこと位はいと易い僕からかけないやうに言うておくから——」

「どうぞお願いします」

話はこれだけです。



分隊長に

「ねエ君、あれに掛金などかけないでくれ給へ」

「さういふわけにゆきませんな」

「どうして行かない、すぐに連れて歸つてもよいといふ位の人間に、たと預けてあるのに、逃げろといつても逃げやしない」

「隊長に一遍言うて下さう」

隊長に電話で聞きますとやつぱりいけません。

「をかしいね、僕は隊長の所に行つて談判してやらう」

といふので自動車を飛ばして行くと

「酒井君、君は役人したことはないからな、分隊長が黙つて君との話しあひで掛

金かけなければ、こちらとしては兎や角言はないよ、だが、部下から掛金かけませうか、かけなくともよろしいかといつてくれば、それは罪のあるないに拘らず掛金かけないでもよいと云へるものでは無い。矢張り、掛金はかけて置けと云ふより仕様がないうちやないか、君、そんなざつくばらんなことを言うてもらつては困る」

私は

「厄介だな、あすこ迄あいつが得心してよく諒解しながら、掛金一つで解決がつかないといふことは残念だからなあ」

と考へて居ると、隊長は

「君、いつそ連れて歸つたらどうだ」

「さあそこだ、それちやかうしよう。あいつ連れて歸るけれども、あれの家に歸さない、正義團の本部の中に入れておかう。それで僕の方でうまくもてなして満



足さしてやる。それをあなたの方で認めてくれませんか」

「責任はもてんな」

「それはよく知つてをるが、あれの家へ歸さないといふことだけは知つておいてくれ」

「よし」

恰度その時でした。私は急いで天津に行かなければならない用がありました。それは熱河省長、湯玉麟の生命を救ふために參謀長との打合せが出来ましたから、その伴の湯作芳に會ひに行くために急いで行くことゝなつてゐたので、私の祕書に向つて

「雷恒成を正義團本部へ連れて歸つて大事にして置いてやつてくれ」

といふことを申しつけて出發しました。それから一週間以上をりましたが、用事をすまして大連へついでみますと號外が出ました。その號外をみると熱河は殆ど

討伐してしまつたといふことでした。そこで關東軍に報告に行つて、喜多少將一（當時大佐）に會つて

「熱河が早く片づいて洵に結構でした」

「お蔭さまで——」

「それぢや、雷恒成もいゝぢやありませんか」

「あらもうようがす」

まるで犬コロを片附ける様を譯で此方では將來日本を恨まない様と日滿兩國國民親善の爲めにした事であるのに、そんな心配は何でもないものの如く感ぜさせられました。そんなものですよ。殊に戦時代ですからね。それから奉天に歸りました。「雷恒成を呼べ」と指圖しました。彼は鬚を剃つて綺麗になつてをります。本部員の半數位は滿洲人でありますから支那料理で丁度百人ほどの賄ひをやつてをりました。だから彼の口にあつたものを作つたので彼は餘程うまかつたらしい。



「お歸り。有難う御座いました」

「雷さん、永い間窮屈だつたらう」

「いや、こつちへ來まして私は歸つたよりも嬉しく事務所で仕事をお手傳ひしてをりました」

「さうだつたか、もういゝからお歸りなさい。もう歸つてよろしい」

「私、歸つたつて用が御座いせんから、此處において下さい」

「何故そんなことを言ふのです。奥さんも子供も待つてゐるぢやありませんか」

「私はこれ位、日本のため、滿洲のために盡しても、なほ且つ危険が伴ひます。

私は主盟の側にをりたいです」

「そんな君、氣の弱いことを言ふものぢやない。君は何處にをらうとも正義團の一人たる以上、正義の神は君を見離さない。どこにをつたつて大丈夫だよ。君のやうな教育のある人がそんなことを言ふものぢやない。さあ自動車を呼んでやれ」

と云うて自動車に乗せて歸しました。

### 雷恒成我が正義團に命を捧ぐ

その翌日午後二時再びやつて來まして私の室に入りまして目禮しました。それから

「一言申し上げたいことがありますからこゝに日本人を一人立會はしてくれませんか」

「それはまたどういふわけだ。話したいことがあるから人拂ひをしてほしいといふことはあるが、話したいことがあるから人を入れるといふことはどういふわけだ」

雷恒成曰く

「私の話したことは證據が残りませんから、誰か立會の下に話を聞いておい



てほしい」

「何だつていゝぢやないか。言うて見給へ」

「それぢや申上げます。私は七歳の時に母に死別しまして父の傳育によつて育ちました。十八歳より日本の陸軍士官學校に父の慈愛の下に入れてもらひました。それから陸軍士官學校を卒業して歐米に漫遊しました。この洋行にしましても父の情けでした。その父は今を去る七年前に亡くなりました。私は日にく淋しく思つてをりました。ところがこの度主盟の慈愛に接して父が再來して来たもの、如く感ぜられてなりません。私は今後父に報ずる氣持であなたに報ずるために、この一命をあなたに捧げますから、如何なる用事にでもお使ひ下さるやうお願い致します。これをお誓ひしたい。誰か一人こゝに立會つて聞いておいてもらつて、貴様の命がほしいと言はれた時に、私が兎や角言はぬやうにその人にチャンと證人に立つて貰ひたかつたのです」

「さうか。それは實に有難いことだ。まあ兎にも角にも正義に盡すといふことは結構だが、お互にシツカリやらう」といふことでその時は済んだのです。併し支那人は口がうまいから何を言ふかわからん、かういふ考へをしてをりました。ところがその後及びまして、蒙古のことにつきまして大問題を惹起致しました。包善一といふものをひつぱり出すについて、そのことを申上げますと話は長くなりますから又次に致しますが、要するに危険を冒して飛び込んで働くものは雷恒成以外にございません。それを私が命じました。「承知しました」一諾の下に行つてその用事を果して来たことがあるのであります。

そこで支那人といふものは、どういふ風にしてこれをやつたらよいかといふことにつきましたは、いろくな理窟も議論もあります、要するに話や表面では見てわかりません。そこ迄徹底して初めて心理を掴むことが出来ます。現に私のところに馬賊が歸順して来た時



「自分の方へ来たつて仕様がなないぢやないか。陸軍に行け」と申しましたら

「陸軍へ行けば歸順さしてやらうというて鐵砲も馬も取上げてしまつて、機關銃でボン／＼殺してしまひます」

さう言ふのです。ところが正義團はいろ／＼な満洲人を助け出してゐる。その噂が馬賊の群迄聞えてゐると見えるのです。尤も馬賊は日本人でそんな情けのある人間がある筈がない。昔から日本人ほど悪い奴はない、それは何かの間違だらう。若しそれが本當ならウツカリ乗つたらその後どんな目に遭ふかわからん、かういつてをつたさうです。ところが私が行つて一ト月や二タ月ぢやない。もう一年半もズツと續いてをりますから、これはどうも本當に神様だといふ風に感じたのでせう。又日本でも二十年以前から正義團が生れて弱者のために働いて來たといふことの事實が満洲では相當響いてをります、そのことがやはり馬賊の耳に入る。

それで本當にさういふ情けのあるえらい者ならば、我々も改心しよう。従はふといふことがはじまりであつたさうです。そして私の方へ申込んで來た。それですから關東軍に相談しましたら

「それは君の方で歸順さしたらよからう。又鐵砲も取上げるのだから多少の金はやらなければならぬだらう」

かういふことを小磯參謀長が話して呉れますから、それぢややらうといふので實行することに致しましたが、その時に私は馬賊に向つて

「お前達も人間、俺達も人間で、馬賊を改心したことがわかりやうがないから、他人の金品を奪ふ鐵砲と馬を引渡してしまへ。それならば初めて改心したといふことがわかるから認めてやらう」

「それは馬と鐵砲は渡されぬ」

「どうして渡されぬ」



「どうして我々は生きてゆきますか」

「それは食ふこと、命の保證はこつちが引受けるから——」

「それさへ引受けて下されば馬や鐵砲はいりません」

ところがこのことが問題になつたですな。

「酒井君、一寸聞くとところによると、君は改心すれば討伐の要はないから命の保證は出來ようけれども、生活の保證をしたさうだが、何萬人をるかかわらない馬賊をどうして養ふつもりか」

「それは滿洲國が養はねば仕様がな」

「冗談ぢやない。馬賊を養ふやうな豫算もなければ資源もない」

「だつて養つてゐるぢやないか」

「養つてゐる？ どういふわけで養つてゐる」

「俺のところへ歸順しようとして出て來た馬賊は支那の南方から入つて來たり、

ロシヤから來たものなら言ひ分があるが、さうでない。この滿洲國の領土内で人を殺すとか、人の物を略奪するとかしてこの領土内で生きてゐる馬賊だらう。その良民の損害は即ち國の損害だ。間接に國家が負担してゐるのだから國が養つてをると思ふがよい」

「君はどうするつもりだ」

「盤山縣を見給へ、相當廣い面積であつて、地面を耕せば作物は幾らでも出來るのに、良民は一步も足を踏み入れることが出來ないぢや無いか。それは馬賊が出て鐵砲をつきつけて金をとられるのが恐いからである。併しさういふことをさせず、改心させるなら、それだけでも、國の利益である。又改心させるには多少費用がある。その費用は増税をしてその得た金で改心をさせたいといへば良民も喜んでその増税に應じてくれるであらう。そして一旦改心した以上は、働かざる者は食ふべからずといふのが正義團である。彼等に鐵砲や馬を持たしておくから



あゝいふ悪いことをするが、それを取上げて働けといへば鋤と鍬を貸してくれといはざるを得ないぢやないか。あれだけ廣い良田が拓けてゐるのだから、働けといへば幾らでも働く」と述べる

「君の言ふ様に行けば良いがそれは保證が出来るか」

「行くか行かぬかやつて見なければ判らぬではないか。歸順させて悪ければ僕は止める迄だ」と云ふ處迄議論が起きた。ところが死なれました武藤元帥のお耳に入りまして、又幕僚會議を開いた結果「兎に角酒井にそれだけは一任せよ」とかういふことになつたので、まあ充分やれといふ命が下りましたから、私はそれぢややつてみようといふので、愈々盤山縣に乘込むことにきめたのであります。

### 盤山縣の馬賊歸順と英人救出事件

ところが馬賊の者にも一つの義侠があり、妙な話がある。あの青山といふ奴を

んか元は陸軍少將です。それが段々落ちぶれて馬賊に變化したのですが、此奴と斐東閣とが話をするに、斐東閣が

「俺とお前は兄弟分だが、自分は正義團に歸順した。そこでお前も正義團に入れ」

青山は

「鐵砲渡してどうなるかわからん。お前が入つたのならそれを見て、やるから、お前だけ歸順せよ。俺は正義團には入らない」

「さうかうすると何だぜ、俺が正義團に入つたならば、馬賊のゐるところ討伐せよと言はれれば、俺もお前を討たなければならぬやうなことが起つて来るが、さうすると困るからは入れ」

「いや俺は入らない。俺は熱河へ行く。熱河へ行けばこゝとは領分が違ふから熱河へ行く。馬の蹄鐵をかへる迄の間待つてくれ、その間討伐しないこと、熱河へ入る道で討伐しない事を頼んでおく」



「さういふ話をしても俺が討伐するのぢやない。陸軍がやるのだ。俺に頼んだつて仕様がなす」

「主盟から陸軍へ交渉してもらつてくれ」

さういふことを言ふ。そこで私は關東軍參謀部へ行つて其の譯を話して馬賊の願ひを申述べた處、岡村中將——その時分は少將で參謀副長でした、その岡村さんが側で聞いてをつて

「ヤー熱河落ちか。面白いなあ、一本道だ。ヤレ〜」

といふわけでありましたが

「一寸待つて下さい」

「何、構ふものか。もと〜人殺しをやつた人間だから、情けもへちまもいらぬ」そんなことを言ふ人もあつた。それから私も

「氣の毒ながらかう〜で聞いてもらへないから、此の事に就ておまへも關係せ

ず、ほつて置け」と云ふと

「私は兄弟分であるからそれは困る。そいつをやられたら我々の義理がすまぬ」とかういつて顔の色が變るのですね。そして

「それちや約束した私の男が立たぬ」

といひます。

支那人にはそんなものはないと思つて居たのですが、やはり義人國定忠治には代官や與力も手に合はなかつたといふが、一方に又固い義理はあつたといふことを聞きました。矢張り悪人は悪人同士で又別な處があつた様です。この青山も遂に亡びてしまひました。

それからズツと後に、英國人が馬賊のために拉致されて、どうしても居所がわからない。英國政府から日本政府に對して、英人をどうか救ひ出してくれと言つて來た。ところが居所がわからない。恰度幸ひに馬賊がこつちに乾兒になつ



てゐるからといふので正義團の方に依頼がありました。で、到頭大體は正義團で救ひ出したのですが、憲兵隊は三十日間も不眠不休で探したけれども、わかりません。四十三日目にやつと救ひ出したのです。まあ、功は憲兵の方へ譲つて兩方からといふことにしたのであります。その後營口でこれは船員であります、馬賊に掠られました。それを私共の方の改心した奴が、我々は日本人の親分をもつたのだから日本人が拉致されたのを見てゐるわけにゆかない。取返しに行かうといふので、言ひつけもしないのにソツクリ十六人が行つて、鐵砲で戦うてその人間を連れて歸りました。新聞にも載りましたが、その時私は馬賊の方に百圓やりましたら喜びましたか

「主盟、次からは金の代りに鐵砲の彈丸下さい、金なんかいらぬ」と言うてをりました。さういふ風に非常に面白いことをやります。一番最初に鄭孝胥氏が言つた如く人類愛には國境がないといふ事をこゝに見せつけられました。

#### 滿洲人の正義團員と國家觀念

それからもう一つ、本團の滿洲人の幹部の者を集めて私はこんな話をしました。

「お前達は何か、國家のことをどう思ふか」

「國家なんて考へてをりません。安心立命を求めてをります。それには正義團の綱領があります」

さういふザツクバランのことを答へました。それから私は

「近き將來に支那の領土内、滿洲の領土内に靑空から火の雨が降るぞ」

といふとカラ〜と笑ふ。

「笑ふな。本當だ。主盟は決して嘘は言はない」

「どういふわけで天から火の雨が降りますか」

「降らすことを祈つてゐる奴がある」



「誰が祈つてゐます？」

「南京政府、國民政府にゐる政治家だ」

「それはまた自分とこに火の雨の降ることを何故祈るのです」

「滿洲國が斯く獨立しただらう。これは日本のためだから日本を何とかして叩きたいのだが、自分では力が及ばぬものだから、歐米諸國をひつばつたりロシヤをひつばつたりして、外國の力を借りて日本を叩かうとしてゐる」

「それは聞いてをります」

「そこで支那の政府の目的効果が擧つて、若しもロシヤであらうが、イギリスであらうが戦ひをするといふことになつてみい。どこで戦ふか、戦ふ場所はやはり支那の領土内で戦ふぞ。さうすると敵も味方も飛行機から爆彈を投下するだらう。どこへ落ちる。やはり支那の領土内に落ちるだらう。さうするとだ。支那の國民は商賣はおろか、工業はおろか、農業はおろか、妻子を連れて避難をしなくちや

ならない。その揚句荒らされた土地はどつちか勝つた方が取つてしまふぞ。それは一體支那の國民にとつていゝことか悪いことか」

「それは主盟大變です」

「ごうだい。だからさういふことのないやうに我々はこれからやらなければならぬ」

「ごうしたらないやうに出來ますか」

「國民が我々正義團、即ち日本の國民も合して、そして斯かる間違つた考へ方をする政治家を國民の力で取除けてしまはなければならぬ。なるほど大臣——日本の政治家でもだ。考へ違ひのある政治家と見れば、やはり我々の團體の力で取つてしまふのだ。そして重要な立派な改革をやるのだ。國民の力でやるのだ。それはどうだ。賛成するか」

「それは大變喜んで賛成します」



喜んで賛成してくれました。そしてそれがために天津へさして正義團の支部をおいてくれとか、河北へおけとかいふことをドン／＼言うてまゐりました。これです。先程私が言つた如く支那をどうしても宣撫する途がないか。ある。どうしてやるか。やはり正義、誠の力でやるのだ。その他の驅引や話合ひの、かうもつて行つたらかう来るだらうといふ考へは到底支那では及びません。向ふは鼻ではじいてをります。武力でゆくかこいつはいけません。何としても支那と手を握らなければ駄目である。日本とすれば、正義といふこと、即ち誠の力でゆかなければならぬと私は思ふ。誰か誠の力でそんなことをする人がありませうか。酒井榮藏のやうな馬鹿だからそんなことを續けた。利巧な人はそんなことをしない。今の政治家なり、學者は皆えらい人ばかりだから私のやうな馬鹿な眞似をするものは一人もない。正義といふやうなことはあまり利巧者には出来ません。

### 六萬大滿洲正義團員の心意氣

さういふ風になりました、これがまた最後のお話であります。正義團としましては六萬七千餘名の團員が出来ました。これを協和會といふものに合併する。他の團體は悉く解散を命ぜられました。そしてグズ／＼するものは退去を命じました。我が正義團だけは公認團體として認められました。さうすると政府から補助が出るわけです。ところが二重の補助が出来ないからといふので、政府が組織してをる協和會へ合併してくれないかといふ實は相談がありました。關東軍第三課長の話です。

「合併するのはよろしいが、合併の仕方はどういふ風に致しますか」

「それは君、無條件だ」

「駄目でせうね」



「どうして駄目だ」

「魚と魚は形に於て變りはないけれども、眞水と鹽水と異ひますから育ちません」

「それだけちや話がわからん」

「詳しく言ふと攻撃になりますぞ」

「構はない」

「ちや話さう、日本には勞資協調會といふのがあるのを御存じですか」

「あれは原内閣當時、床次さんが會長で出來上つた。金が要るといふので故澁澤さんの盡力で三井、三菱等の金を壹千萬圓集め、有力な銀行に預金して場所は芝公園に勞資協調會と云ふ立派な會館を建築して、年々の金利七八十萬圓、これを費用にあて、事務をとつてゐる。役人、内務省畑の人で固めてゐる。その當時私が話した時分には吉田茂君、それから河原田稼吉君になつて、今は町田辰次郎君が理事長である。これは何かといふと、勞資協調を目的に作つたのだが、あれが

出來てから後はストライキが段々殖ゑる一方である。世間から無用の長物だの、怠慢だのと攻撃は矢の如くであつた。そこで私はそれを攻撃するのは無理だ。怠慢でもなければ何でも無い。金と學問と地位とこの三つ揃つて出來ないことは無い筈のものだが、人間の心理は自由にならない。出發點が違つてゐる。人間には好きと嫌ひがある。嫌なものをごれ位説いても好きにならう道はない。好きな、ほれた女にせよ、子供にもせよ嫌になる工夫はない。私は蛇が嫌ひだ。好きになる途がない。我慢はするが、心から好きになる途はない。嬉しいことも悲しいことも怒ることもさうです。どの位嘔鳴られても活動の映畫に就て悲しい場面を見れば涙が出ます。滑稽な場面をみれば笑ひが出ます。これは自然です。絶對性のものである。そこで勞働者は何を嫌つてゐるかといふと、理窟を抜きにして資本主を嫌つてゐる。その次に嫌ひなものは、無産勞働者の心理に理解のない、法一片で取締られて來た役人を嫌つてゐる。ところが勞資協調會は一千萬圓の金



はどこから出したかといふと、己れの嫌ひな資本主から出してをる。誰が事務をとつてゐるか云へは、六、七十名の事務員悉く法で固めた役人上りがやつてゐる。日本の勞資協調は世界の協調の雑誌を集め、これを翻譯して勞働者に與へても何となく忌み嫌ふといふところに一つのデリケートなものがある。

怡度同じことで滿洲國の國民は政府の有難さを未だ會て知らない。その次にこわいものは日本の役人だ。協和會をこしらへてゐるものは誰か、會長が總理の張景惠氏ちやありませんか。その顧問には歴代の軍司令官が最高顧問である。その他の日系官吏が取巻いてゐる。その中に喜んで滿洲人が入つてゐると思召すか、黙つてゐる所以のものは、反滿主義と云はれて後がこわいから嫌々ながらひきずられて入つてゐる。私の方へ入つた六萬七千人は精神の置き所が違つてゐる。我等はこの主盟と共に如何なる仕事も進んでさして頂く。これを守つてゆけば間違つてゐないといふ大決心をもつて居る」

さういふことをダン／＼説明しました。

すると怒つた。

「酒井君、こゝは滿洲國だから苟も其の國の主權者のする事に就て彼是云つても仕方がないではないか。若し君が嫌ならば此處を引揚げて解散の外はないではないか」

と云ふのである。そこで私が

「よく存じてをります。然し私は來たくて初めから來たのぢやない。是非共行つてくれといふので來たのです。解散してくれといふなら喜んで歸ります。その代り解散するが、六萬七千の正義團員の思想が引繰り返る事の責任はもちません。あなたの方でその責任はもつて下さう」

と云ふと

「そんな皮肉なことを言ふな」



といふことで、一寸ゴタ／＼しました。

### 國策の線に沿ひ協和會と合併す

然し結局は協和會からやつて来て

「酒井君、僕のところへ合併するのは嫌だというてゐるさうだが、僕の方だつて君と一緒にゐるのは嫌なんだが、時の政府の言ふことを聞かなければ仕様がないちやないか」

「それはあなた方の言ふことだ。月給貰つてゐるから、椅子に關係があるから聞かなければならないが、我輩は何等そんなものに關係ない。歸れといへば喜んで歸る。己れを偽り他人を偽つて迄も屈辱なんて嫌だ」

「さう片意地なこと言はずと何とか考へてくれんか」

「さう仰しやれば考へませう。それでは協和會は政府からの補助百五十萬圓とい

ふ豫算があるから、協和會の中に正義團ありといふことを認める。海軍と陸軍といふ風に分れては面倒だといふのなら正義團は正義團の立場を明かにして合同しようといふことで漸く話が纏つたのが昨年であります。そして今では正義團といふものは協和會に合併してをります。その時に私は鄭孝胥氏に永いことお世話でしたといふ挨拶をしに行つた。その前にもう一度話はもとに戻りますが、昨年の七、八月頃から團員は動搖して來ました。合併は嫌だといふ。その時に我輩は抑へた。

「嫌だといふけれども、およそ其の國の政府からの命を嫌だというて安住出來たためしはない。俺は日本人だから歸るけれども、お前達はこゝにゐる以上、あいつ等は反滿主義だといふことになる、虐められる。だからそれが可哀さうだから、此の話を纏めたのである。而して自分は今後此の滿洲に往つたり來たりするが決してお前達を見捨てない」



と云ふと、非常に喜んで

「主盟もとどまつてそして相變らず私共と連絡をとつて頂けますか。そんなら言ひ分はございません」

さういふことで動搖が収まつて來たのですが、それを鄭孝胥氏が知りまして

「酒井さん、將來支那を解決するのはあなたですね」

「どうしてですか」

「この疑り深い満人六萬七千といふものが、あなたを慕ふことを御覽なさい。これでなければ駄目です」

と聞かされました。初めて會つた其の時、誠即ち正義の道に國境無しと聞いたのは茲にありと思ひました。私は別に誇るのぢやない。自慢ぶつて話すのぢやありません。これ偏に關東軍の御援助を受けたればこそであります。行き詰つた話ですから、こゝ迄申上げて置かないと要領を得ませんから申上げた次第であります。

相手を打開する。結論と云ふのは矢張り正義でなければならぬと云ふ事になるの  
であります。これから先に有爲轉變は色々あるでせうが、目標は何としても支  
那と日本とが固く手を握り永遠の東亞建設の大目的を達成しなければならぬの  
だといふことをお考へ願ひたいのであります。

(昭和十二年七月二十三日  
大阪市電氣局にて口演)



康德元年六月五日印刷  
康德元年六月十日發行  
昭和十三年十二月廿日三版發行

(非賣品)

編輯兼  
發行人

大久保 隆

東京市芝區高輪南町二九

印刷人

山 縣 彌 一

東京市芝區田村町六丁目廿一

東京市芝區高輪南町二九

發行所 正義時報社出版部

電話高輪(4)五〇九〇番



391  
189

康徳元年六月五日  
昭和十三年十二月廿三日發行

(非賣品)

編輯人

大久保 肇

印刷人

山 田 一

東京市芝區新橋通町二九

發行所 正義時報社出版部

電話號碼三〇九〇番



